毎日コミュニケーションズ

GameFanBooks

ビジュアルガイドブック

ムーンライトシンドローム

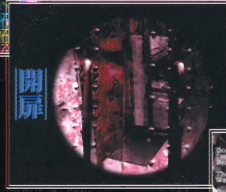
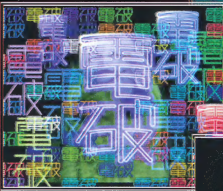
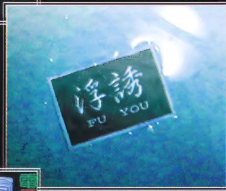
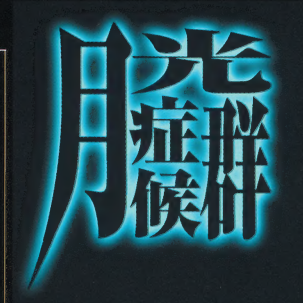
Moonlight Syndrome

毎日コミュニケーションズ

GameFanBooks

ビジュアルガイドブック

Moonlight Syndrome

ムーンライトシンドローム
ビジュアルガイドブック

月光症候群
夢題
奏過
変嫉
HEN
SHITSU
片倫
SCHOOL APPEARANCE
CLASSROOM HALLWAY
CONNECTION PASSAGE
STAIRS
NEW SCHOOL HOUSE
ROOF
FOREST
CORPSE
MURDEROUS WEAPON
KNIFE
CONDOMINIUM'S ROAD
AMBULANCE
浮誘
FU YOU
電破
開扉
慟悪

MOONLIGHT SYNDROME 目次

コントローラの扱い方

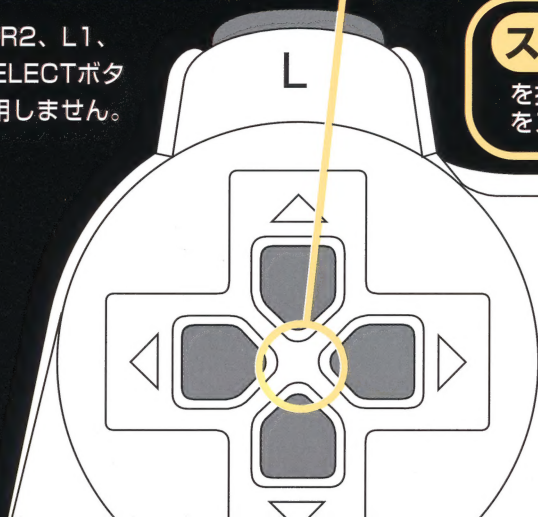
方向キー

歩く

8方向に歩けます。

※R1、R2、L1、L2、SELECTボタンは使用しません。

スタートボタンを押すとタイトルデモをスキップできます。

L

PlayStation

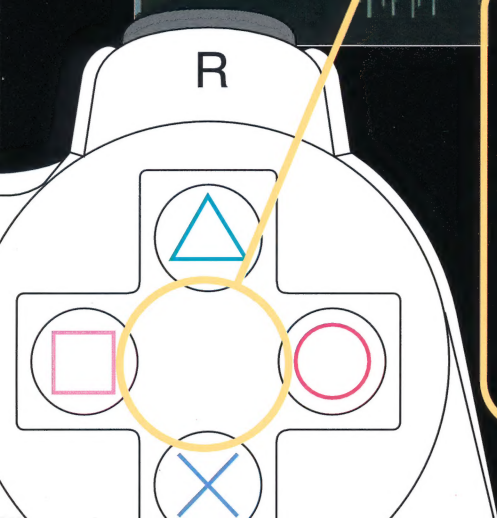
方向キー＋○、△、□、×ボタン

走る

リョウは、
走ることが
出きません。

扉まで移動すると、扉を開けられます。

メッセージを送れます。

R

タイトル画面

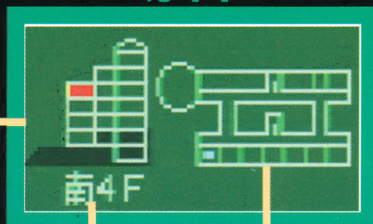
プレイステーションの本体にＤＩＳＫＡ、もしくはＤＩＳＫＢをセットして電源を入れるとタイトル画面になります。

方向キーの上下でメニューをセレクトし、スタートボタン、または○ボタンで決定します。

雛代高校

雛代高校内では、画面右上に**ガイド**が表示されます。

ガイド

南4F

高校を横から見た図。赤く点灯している場所が現在位置を表わしています。

現在いるフロア。青いドットが表示されている場所は、目標地点（イベントが発生する場所）を示しています。

NEW GAME

『ムーンライトシンドローム』をエピソード１からプレイします。

LOAD

前回プレイしたエピソードからスタート出来ます。
データをセーブしてあるメモリーカードが必要です。

セーブ

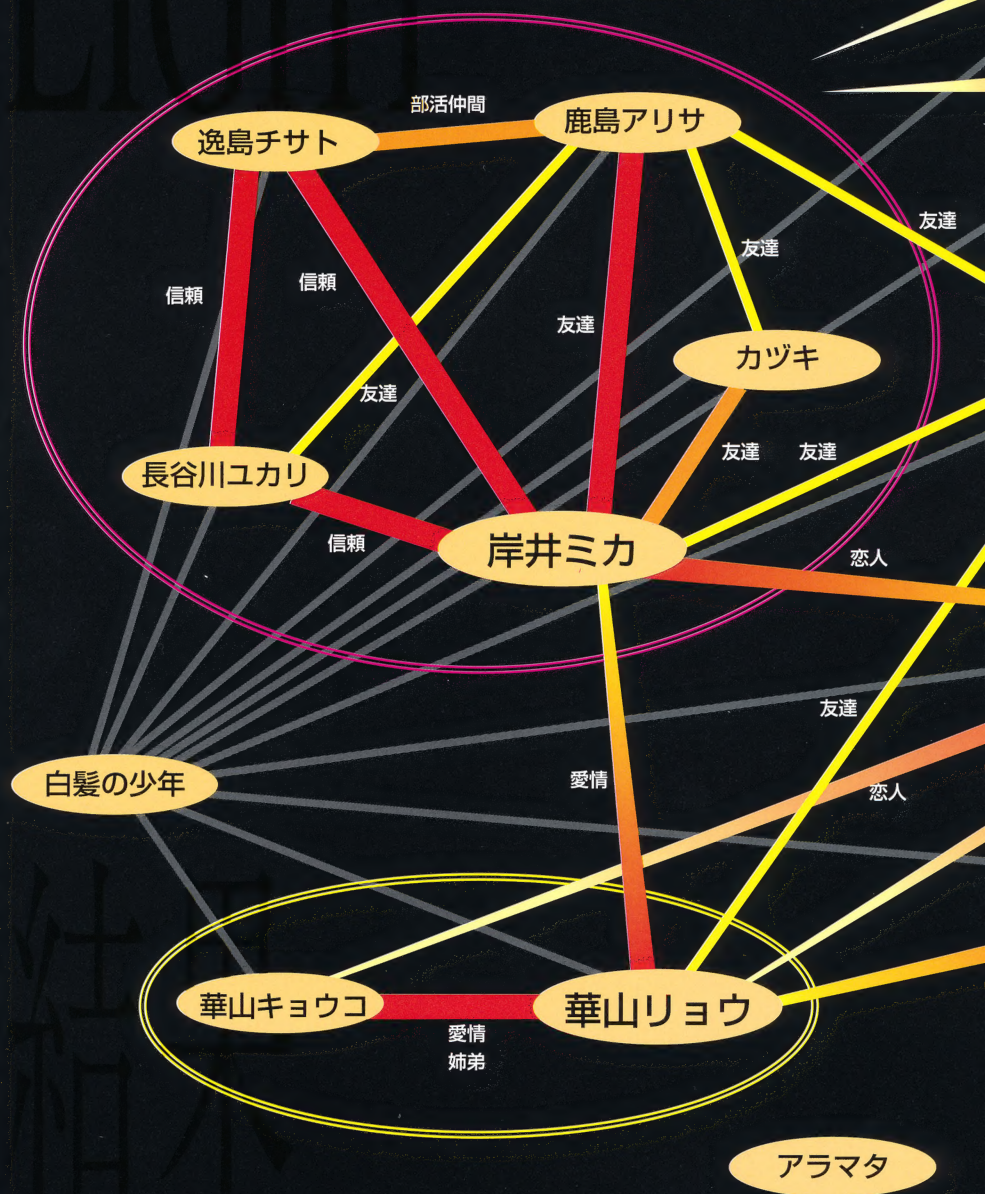
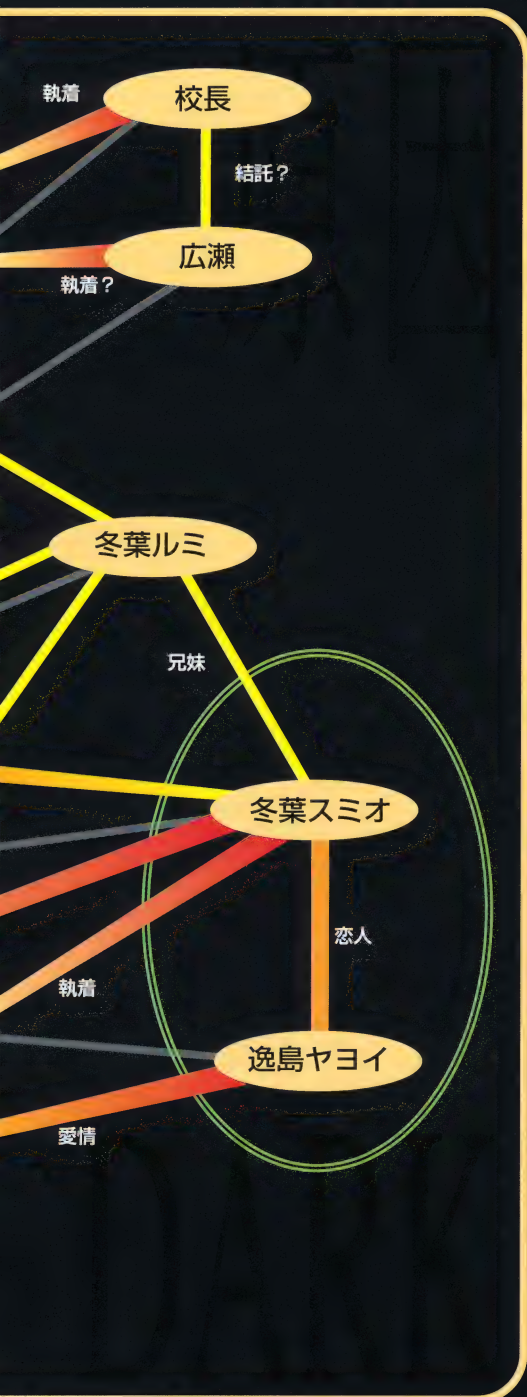
各エピソードが終了すると、メモリーカードに『ムーンライトシンドローム』の進度をセーブ（保存）出来ます。セーブしたくない場合は“ＮＯ”を選択してください。

セーブしますか？ YES NO

メモリーカードにデータをセーブ中です

エピソードの途中に登場する
◀**アラマタ**に、
セーブをしてもらうこともできます。

人物相関図

LIGHT
結末
逸島チサト
鹿島アリサ
部活仲間
信頼
信頼
友達
友達
友達
友達
カヅキ
長谷川ユカリ
友達
友達
岸井ミカ
信頼
恋人
友達
愛情
白髪の少年
恋人
華山キョウコ
華山リョウ
愛情
姉弟
アラマタ

岸井ミカ
雛代高校２年、物語の主人公。いわゆる型にはまった“女子高生”の生活を送っていたが、最近それに疑問を感じている。それは先輩ユカリに因るところが大きい。現代のムーブとは全く別次元に生きるユカリに、知らぬ間に憧れを抱いていた。

長谷川ユカリ
雛代高校３年、前作『トワイライトシンドローム』の主人公。今回はサブスタンスである。相変わらず、流行の風を嫌い“一匹狼”的な生き方をしているようである。が、全く正反対の価値観を持つミカに、心の平穏を見つけていた。

逸島チサト
雛代高校３年、性格は冷静沈着、その心は慈愛に満ちている。極端な価値観を持つミカとユカリにとって、彼女の温厚寛大なハートはかけがえのないものである。彼女には強力な霊感があり、今回もそれにより、２人を困難から救うこととなる。

逸島ヤヨイ
チサトの妹と名乗る女性。しかしチサトはそれを否定しており、真相は不明である。性格はチサトとは正反対、一見もの静かで上品な女性だが、その芯は冷酷。またチサトと同様、強力な霊感を持っており、白髪の少年と関わりを持っている。

鹿島アリサ
雛代高校１年、明るく前向きで、少しとぼけた雰囲気が周囲に安らぎをふり撒いている。マイペース主義で、自分の興味のないことにはひたすら無関心である。また、チサト程強力ではないが、彼女も霊感を持っている。

冬葉ルミ
雛代高校２年。彼女は複雑な人間関係を持つ。リョウとは幼馴染み、リョウの姉キョウコと彼女の兄スミオは恋人であり、自らも兄と関係を持つという、四角関係。そしてスミオ、キョウコはこの世を去り、ルミとリョウだけが残された・・・。

冬葉スミオ
19歳、大学生。ルミの兄でキョウコと恋人関係にあった。しかし、キョウコはスミオよりもリョウを愛した。スミオはそのことに憤り、リョウに精神的圧迫を与えてゆく。そしてキョウコはこの世を去り、彼も後を追うように壮絶な死を遂げる。

華山キョウコ
リョウの最愛の姉で、リョウの唯一の理解者。そしてスミオの恋人でもあった。ところがある日突然交通事故に遭い死んでしまう。彼女はミカに容姿が似ていた。それで姉を失い心に穴の開いたリョウがミカに接近するのは、必然であった。

華山リョウ
物語の“裏”の主人公。高校を中退した彼は、目標がなかった。かといってムーブを追いかけ、周りに同化もできなかった。正に彼は現代の“アウトサイダー”的な存在である。彼の転機は、唯一の理解者キョウコを失ったところから始まる・・・

白髪の少年
とある瞬間に、突然雛代町に現われた謎の少年。その正体は人の“魔”に棲むとされる“契約の天使”ミトラである。彼は、雛代町に渦巻く人の“魔”により呼び寄せられたのである。彼はミカとリョウに固執する。その関係を紡ぐために。

【ムーンライトシンドローム】

Moonlight Syndrome

序論

昭和から平成へ。前作『トワイライトシンドローム』と本作との記号的解釈の違いはそこにある。『トワイライトシンドローム』に描かれていたのは、暮れゆく昭和の家庭的な情景。一方『ムーンライトシンドローム』は、平成の世に狂い咲く人々の愛憎劇となっている。昭和と平成では、なぜ恐怖の質が異なるのか。ここではこの2作品の時代背景を説明しよう。

このふたつの時代の違いで何よりも大きいのは、昭和にはまだ土地のつながりによる共同体が存在していたことだろう。「向こう三軒両隣」という言葉がまだ生きており、隣人との交渉があった時代。「鎮守の森」も現存していた。これは、共同体を外敵から守るものであり、それを越えることはすなわち外敵（霊魂、魑魅魍魎）に身をさらすことを指していた。いわば共同体とその外（異界）との境界の役目を果たしていたのである。『トワイライトシンドローム』が描いていたのは、共同体と異界との境界を越えてしまった少女たちの霊魂との接触だった。今思えばいかにも昭和的な光景だったと言える。

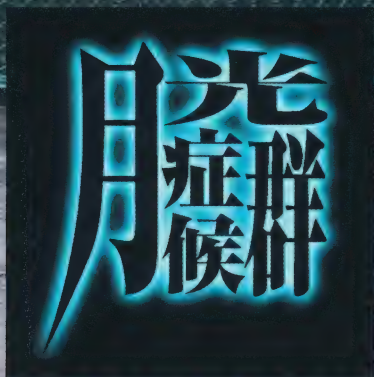
しかし、世が平成に移ると共同体は死滅、隣人の顔さえ知らない閉鎖社会を迎えることとなる。共同体自体がなくなったのだから、当然異界も境界も存在し得ない。霊現象も当然影を潜め、人々の恐怖の対象は別のものに変わっていく。そう、人の内面の狂気だ。

土地のつながりによる土着の共同体を持たなくなった平成の人々だが、その分、精神的なつながりは深まっていった。自分と価値基準を同じくするものだけが集い、コミューンを形成。精神的な絆に支えられた共同体だけに、その範囲は非常に狭い。些細な点から人を差別し、自分たちと相いれないものは徹底して排除する。細分化され、異様なまでに強固な結束を見せるコミューン。この傾向は、『ムーンライトシンドローム』の主人公·ミカたち女子高生に色濃く見られる。

同じ共同体とは言え、昭和と平成ではその色合いを全く異にする。昭和的な共同体に生きる人々は、停滞しがちな生活に刺激を与えるため、自ら異界と接触を図る機会を設けていた。祭りを行ない、神を呼び寄せるのもそのためである。その刺激により、共同体は活性化し、日々の原動力を得ていた。しかし、ミカたち女子高生世代の共同体は、外部からの刺激を完全にシャットアウトしている。他人を差別し、自分たちの中だけでまとまっている彼女たちは、停滞を免れることはできない。内へ内へとこもるこの傾向は、次第に共同体内部に歪みを生じさせる。不安定に揺らぐ閉鎖社会の中で、彼女たちの心は少しずつ狂い始める。

そんな女子高生たちの心の軋みを描きだしたのが、『ムーンライトシンドローム』である。前作『トワイライトシンドローム』から1年しかたっていないが、そこに描かれているのは前作とはまったく質の違う恐怖だ。時代が生んだ歪みと狂気。『ムーンライトシンドローム』は、まさに現代という世相を反映したサイコホラーである。

プロローグ

概要

雛代町――次々と古い建物が取り壊され、
新しいものに塗りかえられつつある街。
急激に進化を遂げる新興都市である。
岸井ミカはその街に住んでいた。

ミカは、その街に忍び寄るいい知れぬ“影”を感じ、
漠然とした不安を感じていた。
ある日の下校時、夜道を歩くミカを尾行する影があった。
ミカは背筋に冷たいものを感じつつ足を早めるが、
背後から迫る足音は消えることがなかった。
突然、子供の笑い声が響きわたった。
ミカはたまらず走り出し、家へと逃げ帰った。

夜、恋人からの呼び出しを受けたミカは、
家を抜け出した。
待ち合わせ場所へと向かう途中、
黒ずくめの異様な男とすれ違った。
……恋人は無表情でミカを迎えた。
ミカは恋人の異変に気付かなかった。

翌日の学校で、
ミカは自分とそっくりの先輩、キョウコの事故死を知った。
自分と同じ顔をした女性の死に動揺したミカは、
些細なことからクラスメイトと口論になった。
最近弱気じゃん。
ミカ自身も、そんなことは自覚していた。

夕食。
食卓を囲みながら、ミカは自宅前で出会った
白髪の不思議な少年の話をするが、
母親にとってそれはどうでもいい話だった。
父親が驚きの声を上げた。
これ、ミカじゃないのか？
テレビのニュースでは、
ミカに瓜ふたつの女性、
キョウコの事故死が報じられていた……。

プロローグ

岸井さん…、岸井さん…
わたしですよ、
わたし。

それはね、岸井さん
あなた方はこの街に住んでいるからです。

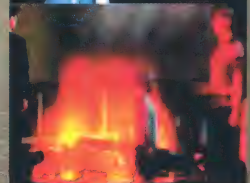
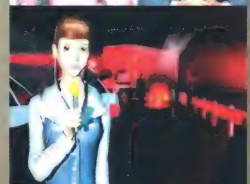
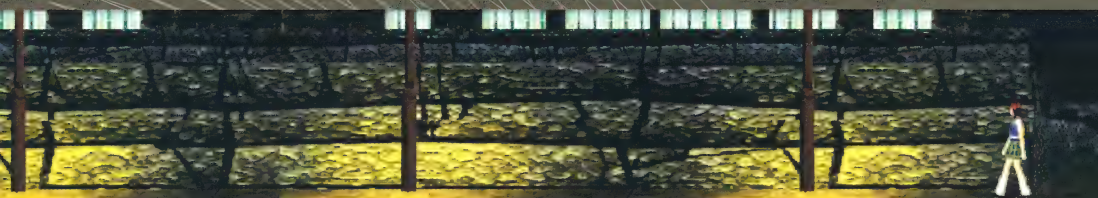
オープニング

何者かの影がミカの後を尾けるシーン。先に歩くと、つられて自分の足音とは別の足音が、背後から迫ってくる。振り向くか、無視するか……？　選択によってほんの少し展開が変わる。

外出

恋人から、いつもの場所で会いたい、と連絡を受けたミカは、こっそり外出することにする。あくまで“こっそり”とであるから、あまりドタンバタンしないように。“静かに”出ないと、親に見つかってしまう。

……キョウコ？

……まさか
そんなわけないか

ねえねえ、聞いた?
麗月峠のでしょ
すごい事故
らしいじゃん
キョウコさん、
死んだとか……
クラブ行こうよ
昨日なんか自殺あったらしくて
今日なんかそのイベントやるんだって
ックの事故
落とし物
だよ……
あっ!
おい!
これミカじゃ
ないのか?
華山　響子さん（18）

●紫の男

冒頭時にミカをストーキングする、スーツの男は何者なのだろうか。彼は応対の仕方で態度やセリフが変化する。それらのセリフから、正体は、1. 単なる変態。2. 単なる新興宗教関係者。と考えられる。しかし突然姿を消したり、これからミカに襲いかかる出来事について何か、あるいは全て知っているような言動から、ヤヨイやチサトのような 3. 超能力者か、もしくは、白髪の少年ミトラと同様の 4. 神か悪魔、と考えることも出来る。もっとも、ミカの恐怖が生んだ、“思い込みの幻”と言われたらそれまでなのだが……。いずれにしてもこの男の正体は、物語中明らかになることはない。

●テレビに映るあの二人

白髪の少年とスミオらしき人物が映っている。この2人が事実、白髪の少年とスミオであるならば、キョウコの死に2人が関わっている線は濃厚である。ここで2つの疑問が発生する。まず、何故スミオは恋人であるキョウコを殺した（可能性がある）のか？　リョウを絶望させるためにしたことなのか？　少年の単独犯で、スミオはそれを止めようとしただけなのか？　謎は解決しない。もう一つの疑問、それは「夢題」で明らかになるが、このとき既にスミオは死んでいるはずなのである。死んでいる人間が何故ここにいるのか？　霊魂か？　死んだスミオが、偽物なのか？　謎は尽きない。

一つの解釈

昭和の名残を感じさせる旧校舎はもちろんのこと、新校舎までもが取り壊され、無機質な光を放つ新々校舎がそびえたつ雛代高校。『ムーンライトシンドローム』のオープニングは、前作『トワイライトシンドローム』が見せた暮れゆく昭和の気配、黄昏の匂いを払拭する象徴的なシーンから始まる。昭和から平成へ。ひとり立ちつくし、その光景を仰ぎ見る岸井ミカ。時代に敏感なはずの女子高生でさえ、都市の変化のスピードに置いてきぼりをくらわされてしまう。高校、そして雛代の町の急激な変化に、ミカたち住民はとまどいを感じずにいられない。はっきりした自覚症状こそないものの、漠然と感じる居心地の悪さ。不安定感の種子は、すでに彼女たちの心に植え付けられている。

たとえば、夜道を歩くミカの背後に迫る影。目に見えない影は、ミカの心に巣くう捕まえどころのない不安を表すもの。実態は見えないものの、不穏な空気に心のざわめきを押さえることができない。振り向いても振り向いても、影の主の姿は見えない。そんな彼女をからかうように、少年の笑い声が雛代町に響きわたる。──ミトラ降臨。急速な変化に歪みを生じ始めた雛代の町は、この瞬間人の「魔」に住むとされるこの神に魅入られたのである。ミカの感じる不安を具象化したかのような怪現象は、白髪の少年・ミトラの雛代降臨から始まる。

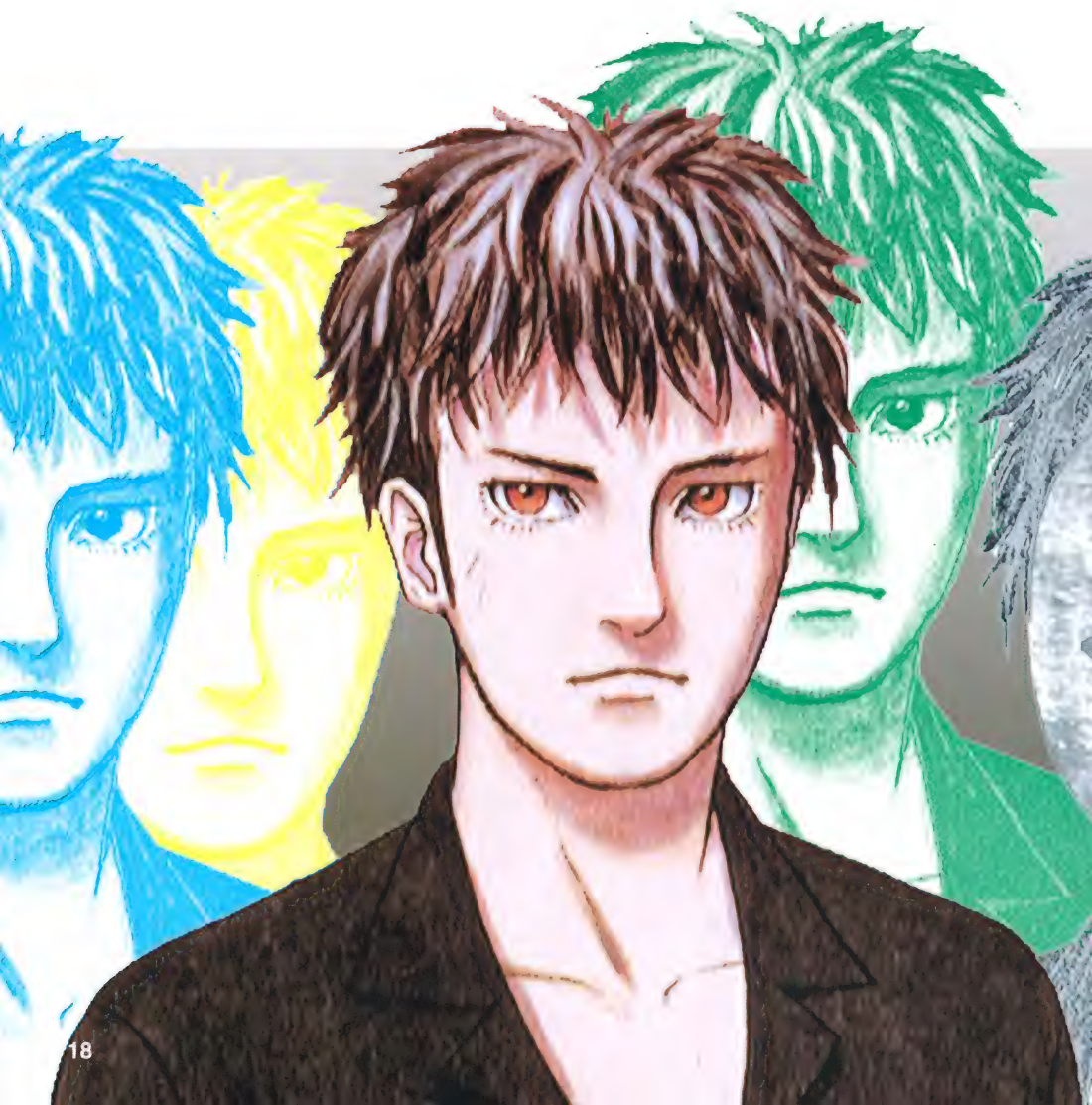
ミトラが雛代に降り立ったことにより、様々な事件が引き起こされる。ミカとリョウとの出会いも、ミトラの企てによるものと思われる。恋してやまないスミオに呼び出され、満月の下を急ぐミカは、全身黒ずくめで異質なオーラを放つリョウとすれ違う。運命の出会いは、ミカとリョウふたりを深く知るスミオが仕組んだものと考えるのが妥当だろう。「お前に執着する」。エピソード2「夢題」において告げたスミオのリョウへの罠のひとつが、ミカとリョウとを引き合わせることだったのだろう。最愛の姉・キョウコを亡くし、よりどころを失ったリョウが、キョウコにうりふたつのミカに心の救済を求めるのは必然である。しかし、ミカとリョウとが交わることは決してない。

一方ミカは、翌日学校で事故死したキョウコの噂を友人から聞く。自分そっくりの女性が壮絶な死を遂げたと聞き、ミカはうす寒いものを感じることを禁じ得ない。自分と同じ顔をした女性の死。今まで目に見えないまま忍び寄っていた不安感が、ようやく形となった。時代の脅威、何か大きな渦に巻き込まれていく感覚を、ミカはしっかりと確信する。

概要

華山キョウコ最後の１日──。

リョウは姉キョウコの夢を見た。愛している……。姉弟の間柄では言ってはならない話を口にするキョウコに、リョウは困惑した。それでも、リョウはキョウコの愛を受け入れた。そんな夢を見てしまったリョウは、自分に対する嫌悪感にさいなまれた。

スミオはキョウコの恋人だった。「キョウコとの仲に割って入るキミの無神経さが許せない」　そうリョウを罵り、スミオは去った。自らを否定され、心の平穏を失ったリョウは、クラブへと向かった。

そこで出会ったヤヨイという女性。優しく話しかけてくるヤヨイに、リョウは安らぎを感じた。「キョウコのこと、忘れさせてあげる……」。案内された一室にはスミオが待ち構えていた。全てスミオの差し金だったと知り、リョウは怒りを覚えた。これは復讐だよ。ヤヨイが差し出した紙袋の中身を見て、リョウの自我は完全に崩壊した。

――高橋キミカは、遂にスミオを発見した。キミカは、自らを弄んだスミオを恨んでいた。復讐してやる。自らの体に火をつけたキミカに対し、スミオは高らかに笑った。キミカの体を覆う炎は、スミオを巻き込み、ふたりは息絶えた。

正気を取り戻し家に帰ったリョウは、そして、キョウコから最後の電話を受けた。

ただの変態じゃねーか、
これじゃ
オレはこんなに弱くない

リョウの夢

リョウの夢。リョウとキョウコの会話。彼等の事情も知らず、エピソードは唐突に始まる。“守る”か“守ってもらう”か。いきなり突き出される選択肢は、どう選んでも一つの結論に収束する。それは、リョウ自身がそう望んでいるから、と考えられないこともない。この夢は2度目以降のプレイで、より理解を深めることができるだろう。

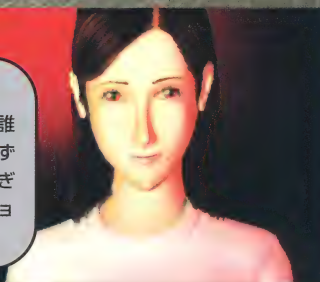
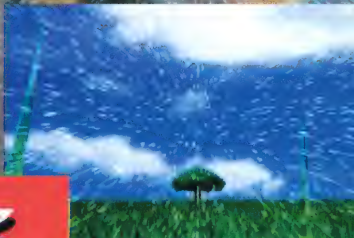
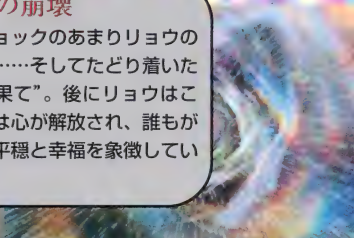
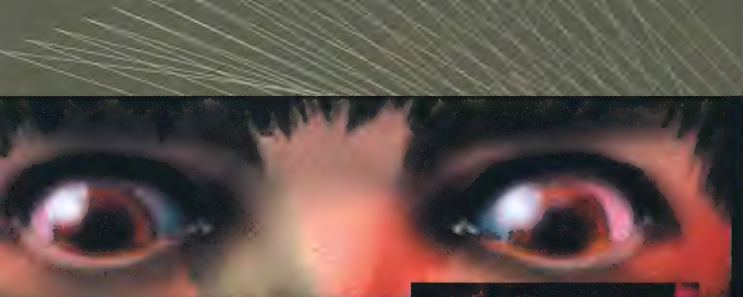
情けないヤツだな……
キミは
キョウコの何も
解ってない

華山キョウコ、最後の1日

可哀想な男……
……心を消費して
逃避してるのはアンタだよっ

なんだよあのファッション
ウチの店、
解ってないね
メチャ
カッコ悪いよ……

ヤヨイとの出会い

安らぎを求めて地下に潜ったリョウ。“誰にも干渉されたくない”理由で入ったはずが、話しかけてきたヤヨイに微かな安らぎを感じてしまう。そしてヤヨイはそのリョウの心を知っているかのようである……。

さあ リョウ君
見るんだ

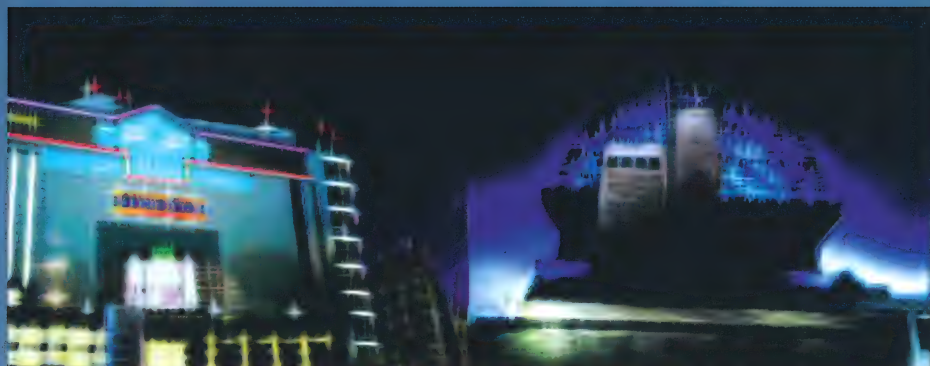
リョウ、
私をスミオから
助けて…

華山キョウコ、最後の1日

見て、空……
雲が大きくて
吸い込まれそう……

自我の崩壊

袋の中味を見て、ショックのあまりリョウの精神は壊れてしまう……そしてたどり着いた(見た)風景"世界の果て"。後にリョウはここをそう呼ぶ。ここは心が解放され、誰もが素直になれる場所、平穏と幸福を象徴している場所……。

この瞬間がずっと
続けばいいのに……

●近郊都市開発についての会話

クラブ内のショットバーで、若い男2人が交している会話で、近年の雛代町の都市開発について話が上がる。便利になって良かった、という一方の男。昔の風景が跡形も残っていない、と嘆くもう片方の男。“都市の進化”は、この物語の下に流れるテーマの源でもある。都市が変わる、時代が変わる、見た目が変化すると同時に、人々の意識、メンタルな部分も変わっていく。人間はより精神的なスピリチュアルな生き物に“進化”するのか……

●“バイオレンス・ジャック”

ヤヨイがリョウに差し出した包みには、何が入っていたのか。これは断定させてもらおう、ナマ首である（ヒューマンの資料より）。さて、このナマ首は誰のものか。“首”というキーワードでまず思い出されるのは、「奏遇」のラクロス部員の会話中に登場する“首なし自殺体”である。これは本エピソード中、焼死した高橋キミカと同一人物と思われる。また、「慟悪」で見ることとなる“継ぎはぎ死体”の頭部もキミカのものであった。しかし、この推理は決定的な矛盾が生じている。リョウがナマ首をプレゼントされたのは、キミカが焼死する前なのである。キミカが生きているうちに、キミカの首を取ることは、当然、できない。……はずだが、さて？

一つの解釈

リョウ、キョウコ、スミオ、ルミ。この4者の愛憎のもつれから、スミオによるリョウへの復讐劇がはじまる。キョウコとスミオの間に、無邪気な顔で割って入るリョウ。単なる姉弟以上の愛情、口に出せないからこそ深く強い絆がそこにはあった。「キョウコの中のリョウが、常に俺をレイプしていた」。スミオはそう憤り、リョウへの妄執を誓う。

スミオは、ヤヨイを使いリョウの精神に揺さぶりを掛け、さらにリョウへのプレゼントをもって彼の自我を崩壊させる。なおかつそれでは飽きたらず、キョウコの死、そして自らの死をもってリョウの精神を完全に破壊しにかかる。前話「プロローグ」で描かれたキョウコの事故死現場を思い出してほしい。そこにはスミオと白髪の少年・ミトラの姿が見られた。これは、彼女の死にふたりが大きく関わっていたことを示している。スミオは契約の神・ミトラと何らかの契約を締結する。それはキョウコとスミオ、ふたりの死に関係する契約だろう。キョウコの死により、リョウに多大なるダメージを与え、そして自らの死をもって、リョウに永遠の呪いをかける。おそらくこれがスミオの目的ではないだろうか。死は終焉ではなく、魂の漂泊の始まり。死をこの世界からの「肉体の消失」と考えるのでなく、時間的空間的束縛からの「魂の解放」ととらえる。その結果、スミオの死後も彼の意志は生き続け、リョウは彼によって運命を狂わされる。彼を助け、幼い頃から守り続けてくれたキョウコは、もはや手の届かないところへ旅だった後である。リョウはひとり、迷走する運命と戦わなければならない。スミオの言うとおり、弱者として朽ち果てるか、その立場に甘んじず運命に立ち向かうか、これはスミオが期せずして与えたひとつの試練なのである。

自我が崩壊したリョウは、青く澄んだ広い世界を見る。スミオもキョウコもルミもリョウも、皆が意識を解放し、穏やかな笑みを浮かべる魂の安住の地。他者の精神への介入、嫉妬、妄執のない世界。もはや戻ることのできない不確かな時間に最後の別れを告げるように、リョウは過酷な現実の中に戻っていく。雛代町を襲う一連の事件が終焉を迎えるまで、リョウは2度とこの穏やかな光景を見ることはなかった。

奏遇 奏遇 奏遇 奏遇

概要

最近、自分の好奇心を満たすウワサがない。
退屈な日常に不満を感じていたミカは、どんな些細なことでもいいから、と友人にせがみ、
とうとうひとつのウワサを入手した。
化学の広瀬先生の様子がおかしい。
他愛もないものだったが、ミカは先輩のユカリを誘って、早速広瀬を見張り始めた。扉の隙間から様子を窺うと、
広瀬は確かに挙動不審。と、広瀬は突然、
大慌てで化学室から飛び出していった。後を追う二人のたどりついた先はトイレ……。

呆れたユカリはミカを置いて帰ってしまった。ミカも家へ帰ろうとするが、ラクロス部員に捕まり、
強制的に部活に参加させられるのだった。

部活後、部室でおしゃべりを楽しんでいると、
部員のひとりが、先日自殺した
雛代高校の生徒の話を始めた。
死体の首だけが発見されていないと言う……。

不意に辺りは真っ暗になり、
気づくと部室にはミカ独りだけになっていた。
そこへどこからともなく
白髪の少年が現れ、
ミカに予言めいたことを語った。

ミカの周りでこれから悲惨な事件が起こるだろうけれど、

それは既に決められていることなんだ。

僕はミカの肉体から魂を解放しにきたんだよ……。

部室には元の喧噪が戻っていた。
何事もなかったかのように。

いってきま〜す

ミカ、ついでに
ゴミだしといてね

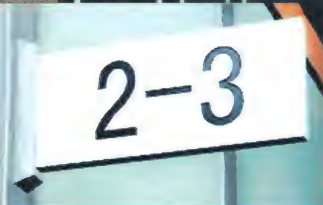
モーッ、いつも人が急いでいるときに
言うんだから

奏遇

ああ、
ユカリちゃんだったら
どっかに
いっちゃったみたい。

2-3

放課後

放課後になると、ミカを任意で動かせるようになる。学校内をうろつくのも、真直ぐ家に帰るのも自由。何か面白いことはないか、ミカの好奇心に従って行動するのもいい。今日もありふれた一日のはずなのだから。

センパ～イッ　なんで屋上でヨコになってんですか?

広瀬のウワサ

カヅキから広瀬のウワサを入手すると、イベントが一つ増える。果たしてこのウワサは、ミカの心の飢えを癒すことができるのか？

ね～、昨日のニュース見た?

あーアレでしょ
ウチのガッコの奴が
死んだって、
死体のクビだけが
発見されなかったって

エッ…?

フフフッ
久しぶりだね
ミカ……

でも
大丈夫だよ

僕はミカの魂を救いに来たんだ。

●“あの時”

そう、あの時から、あの時に運命が決まった…。少年は言う、運命は予め決められているのだと。人々は、世の中の大きな流れには逆らえないのだと。そして、運命は“あの時”に決まったと。“あの時”とは一体どの時なのだろうか。

この物語のテーマの一つは、先述の通り“時代の変化(時代の交代)”である。「プロローグ」の最初のシーン、校舎が壊されるシーンは、正にそれを象徴しているかのようである。そして新校舎が建ち、街が様変わりし、白髪の少年――ミトラが雛代町に降り立った。これが“あの時”と仮定すると、ミトラは自分が降り立ったことで、運命が決まった、と言っていることになる。つまり、自分が運命を紡ぐ者だ、と捉えることもできる。しかし「開扉」ではこう言っている。自分は見ているだけだと、傍観者に過ぎないと。

こう考えることはできないか――ミトラも何者かに遣わされた。“大きな流れ”によって、雛代町に呼び寄せられた。ミトラ自身も“大きな流れ”には逆らえない……。

結局、残念ながら結論は出ない。ミトラ自身も何気なく言った言葉で、別に深い意味は無いのかも知れない。だが、このように“深読み”することも、この物語の一つの面白さではないだろうか。

一つの解釈

前話「夢題」では、リョウを襲う過酷な運命が描かれていたが、エピソード3「奏遇」では、ついにミカの元に運命の魔手が伸びてくる。白髪の少年・ミトラは、ミカにまでいたずらを仕掛けようと試みるのだ。

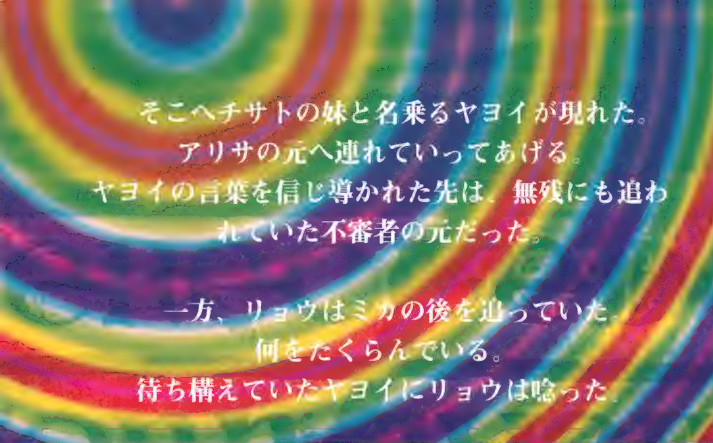
ウワサを求めて無邪気に駆け回るミカ。それを小馬鹿にしつつも結局はミカにつきあうユカリ。前作『トワイライトシンドローム』を思い起こさせるふたりのやりとりは、幸せな過去の象徴である。前作から1年がたち、受験を控えるユカリだが、彼女とミカとをつなぐ絆、根底を流れる友情は変わっていない。しかしふたりをめぐる環境は、そんな関係をも押し流す勢いで急速に変わってゆく。現に怪しい影はミカの元にも忍び寄っており、それは徐々にはっきりした形を取りつつある。ふたりの関係が平和であればあるほど、これから起こるであろう悲惨な事件とその衝撃の大きさを想像して、痛ましさを感じずにはいられない。

そしていよいよミトラ再登場である。舞台はラクロス部部室。焼死した高橋キミカの死体が首なしだったことをウワサした瞬間、部室に異様な空気が漂い、ふと気づくとミカひとり取り残されてしまう。キミカの話題を引き金に彼が登場したことから考え、キョウコとスミオの死だけでなく、彼女の死にも少年が大きく関与していたことがわかる。ヤヨイがリョウに捧げた紙袋の中身、これも今ならはっきりわかるだろう。「死は単なる肉体の消滅ではなく、魂を解放することだ」。そう告げたミトラは、重ねてミカの魂についても言及する。彼はミカの魂を救いに来たと言うが、「魂の解放＝死」であることを考えると、これは事実上ミカの死刑宣告であるのだろうか。人間の意志ではどうしようもない運命があること、ミカもその運命の奔流に飲み込まれること。このふたつの言葉を残して彼は去っていく。一方的な通告に驚くばかりのミカだが、この後ミカが感じていた漠然とした不安は、様々な怪事件というはっきりと目に見える形に置き換えられていくのである。もちろんそれを見守るリョウも、彼女とともに運命に巻き込まれるのを抗うすべは持たない。ミトラとミカとの遭遇により、リョウとミカとの間にも必然的に運命の糸が生じてしまったことになる。

変嫉
HEN SHITSU

概要

妖精に金の粉をかけられた夢――。血まみれのチサトに罵声を浴びせられる夢――。いつかすれ違った男リョウに奇妙な発言をされる夢――。後味の悪い夢を見て寝坊したミカは、アリサからの電話で起こされた。

ミカは、
アリサとルミの3人で
ショッピングに行く約束をしていた。
待ち合わせ場所へ急ぐミカの前に、
不審な者達が立ち塞がった。
次々と絡んでくる不審者に対し、
巧みな応対で何とか切り抜けるものの、
気味悪さは
澱のようにミカの心に残った。
待ち合わせ場所に着いたミカは
アリサと合流。
ルミを探そう、
とミカは提案するが、
アリサは我を通そうと譲らなかった。
アリサと別れ、ルミを捜し出すものの、
"友情"について口論となり、
とうとう
ミカは独りぼっちになってしまった。

そこへチサトの妹と名乗るヤヨイが現れた。
アリサの元へ連れていってあげる。
ヤヨイの言葉を信じ導かれた先は、無残にも追われていた不審者の元だった。

一方、リョウはミカの後を追っていた。
何をたくらんでいる。
待ち構えていたヤヨイにリョウは唸った。

そしてヤヨイはリョウを地下クラブへと導いた。
そこには、
ヤヨイを膝枕する白髪の少年の姿があった。

普通の住人

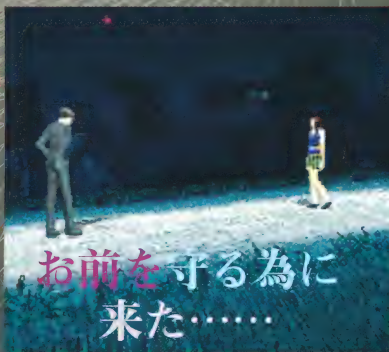
霜北に急ぐミカに対し、なぜか町の住人が絡んで来る。住人に“正しい”対応をしないと、ミカは住民の怒りを買い襲われていまう。しかし、なぜミカが襲われるか、白髪の少年が関係しているのか、
それともこの町がそうさせているのか……。

おい子供が
どこへ行くんだ？

ハーハー

ハーハー
かわいいな～
が、我慢できないよ
アハハ

やっぱりそうなの。
どこに隠したのよ
恨むわよ……

みんな泣いてたよ
泣き叫んでね、暴れてね
惨めだよ
ヘンな顔してフフッ
バカみたい
フフフッ、無様な家庭なんだね

なんか……歪んでる、この街……

どっかで休もうよ〜
甘いもの食べた〜い

友達ねぇ
甘いよミカは
誰が助けてくれるの？

……大切に
育てられたんだね
この世界は
そういう世界なのよ。

霜北

霜北ですることは、アリサとルミを捜し出すこと。二人とも自分勝手な行動を取ってミカを困らせる（まぁ、そもそも遅刻したミカが一番悪いのだが）。そして結局、ミカは一人になってしまうのである。

なんだこいつ
……ヤバッ

助けて……誰か……

●ミカの夢

冒頭で、風が吹く。「あれ……この匂い」"懐かしい匂い"とミカは言った。この"匂い"は、いわゆる"郷愁"的なものなのだろうか。久しぶりに故郷に帰ると、ずうっと忘れていた故郷の、街の匂い、実家の家の中の独特の匂いを思い出す、そんな感覚だろうか。もしも、ずうっと同じ場所に住んでいたとしても、同じ場所の昔の空気を吸えば"郷愁"を感じるだろうか。

ところで思い出して欲しい。「プロローグ」で、ミカは無表情のスミオに対して"あなたの顔、何だか懐かしい"と言っている。ミカはスミオの顔を見て、どんな風景を思い出したのか……

●女子高生キラー「バイオレンス河野」

人は、他人と比べることで、自らの社会的な"位置"を把握している。そして、周りを見て、周りのみんなから外れ過ぎないように、自分の"位置"を(多かれ少なかれ)修正している。流行に"遅れ"ないよう、ハヤリの"中心"にいるよう行動する、それは、自分の"位置"をみんなの"位置"と比べて、修正していることと言えよう。

ミカはその能力が優れていた。ウワサをいち早く聞きつけ、行動し、実践し、「開扉」でアリサが言っているように"完成された女子高生"となっていた。

しかし反面、ミカは"我が道を行く"ユカリに憧れを抱いていた。自分の、安息の"位置"と、憧れている"位置"のギャップ。流行の「バイオレンス河野」を知らないミカに対し、アリサは「知らないの？　終わってるね……」と言う。女子高生を演じる自分から本当になりたい自分への脱皮が、ミカの中で起こり始めているのかもしれない。

一つの解釈

本話では、ミトラだけでなくヤヨイまでもがミカをつけねらう。不安を駆り立てる夢を断続的に見、町中で変質者に立て続けに声を掛けられ、なおかつルミと口論したことで、ミカは精神的に不安定になる。特にルミのミカに対する苦言は、ミカが信じていたユカリ、チサトとの関係を根底から覆すものであり、困惑を隠しきれない。土着の共同体を持たないミカにとって、世代特有の共通意識に支えられたユカリやチサトとの関係は、自らの存在基盤ともなっていた。それを否定されたことは、ミカにとって大きな痛手となる。折も折、一見お気楽そうだが、群れをつくらずとも行動できるアリサにギャップを感じていたことも、少なからずミカの心理に影響を与えていたはずだ。さらに、ルミがミカと今は亡きスミオとの関係を知っていたことも、彼女の精神に揺さぶりをかけるのに十分だった。

その時に現れたのがヤヨイである。チサトの妹を名乗りつつも、姉の持つ温かみを感じさせない彼女に好印象は持てなかったが、それでもミカは彼女についていく。群れることでしか自己を確認できないミカにとって、ひとりを実感するのは、耐えがたいことだったのだろう。アリサに会わせてくれるという言葉、そしてチサトの妹という唯一の絆に頼り、ミカは彼女と行動をともにする。

しかし、ヤヨイが導いたのは変質者のもとだった。執拗にミカを追い回し、ついに17歳の柔肌を毒牙にかけようというその瞬間、ユカリとチサトが現れ、ミカは間一髪のところで救い出される。「私とユカリがミカを守ってあげる」。世のすべてに不信感を抱き、精神の崩壊を迎えようとしていたミカだが、チサトのこの言葉により、かろうじて正気を保つことができた。

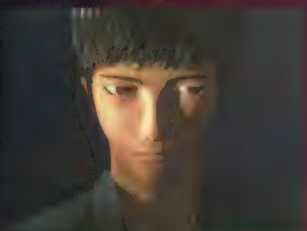
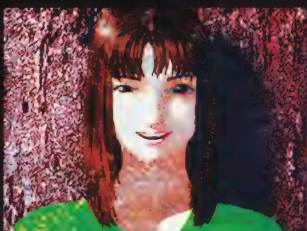
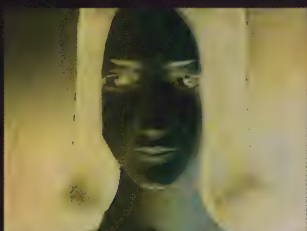
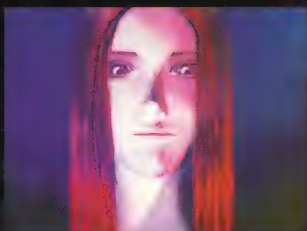
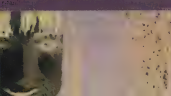
白髪の少年・ミトラの予言は、この事件を皮切りに次々と現実化していく。彼に隷属しているかのように仕えるヤヨイ、彼女の存在は、まだ謎に包まれたままだ。

一方、苦難の道を歩き始めたミカを守るべく運命づけられたのがリョウ。ミカの夢の中に現れ、「おまえを守るために来た」とミカに訴えるも、彼女は気味悪がるばかり。ふたりの関係は常に一方通行で、お互いに向き合うことはない。高みにいるミカに手を伸ばし、もがき苦しむリョウだが、その思いが報われる日は果てしなく遠い。

概要

放課後の教室。
ミカはクラスメイトと談笑していた。
ふと見覚えのある白髪の少年が
視界の隅に映った。
少年は廊下を駆け抜け、
いずこともなく消えていった。ミカは
つられて教室を飛び出していた。

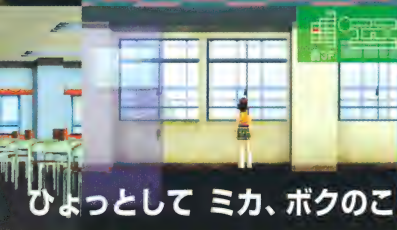
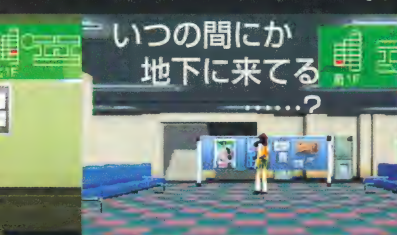
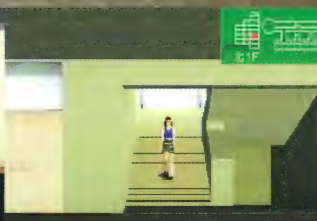
少年を追い、校内を駆け回るミカだが、
なぜか行きたいところに
たどりつけない。
階段を上っているのに下の階に出る、
下れば屋上に出る。
苛立ちながらも
ようやく少年の姿を発見したミカ。
彼の後を追い教室へ飛び込むが、
気がつくとそこは深い森の中だった。

そこにはユカリやチサト、
そしてクラスメイトたちが
笑いさざめいていた。
自分も仲間に入りたい。
ミカはそう願ったが、
誰ひとりミカに気づくことなく、
彼女達は次第に遠ざかっていった……。

気がつくと、
手に血塗れのナイフを持ち、
ミカは立ち尽くしていた。
ミカの目には、
刺殺された友達の映像が
飛び込んできた。
少年の声がささやく。
ミカがやったんだ。
自分の存在を否定する
邪魔者を消すために。
ミカはただ、悲鳴を上げた。

その瞬間、
ミカは現実に引き戻された。
ミカは、自分が教室に独り立っていること
に気づいた。

あれ？ あの子 たしか……

片倫 HEN RIN

あーナンカもうハマってるよ……

ひょっとして ミカ、ボクのこと探してるのかな？

なんで地上から
いきなり
屋上につながってんのよ？

歪んだ校舎

少年を追い、教室を出ると、廊下や階段の位置がめちゃくちゃになってしまっている。階段を上ると地下に出たり、4階の渡り廊下から1階に出たり。この混乱している校舎をさまよい、白髪の少年を捜し出さねばならない。

ボクはこっちだってば……クックック

……ナニコレ
ココハ、
ドコ

ミンナ、オイテカナイデ
ソッチニハ行キタクナイ

ドウシテ
誰モ私ニ
気ヅイテ
クレナイノ?

ミンナ楽シソウニ笑ッテイル

●霧深い森

学校内をさんざんさまよったミカは、最後に霧深い森にたどり着く。ミカはみんなを発見するが、みんなはミカの傍から離れて消えてしまう。そしてミカは深い森の中で独りきりになってしまう。

ミカの見た森は、何を象徴しているのか？　そしてその中で独りになってしまったことは何を意味しているのか？　右も左も分からない深い森の中で自分の存在を確認してくれる者は、みんな――"仲間"しかいない。"仲間"と一緒に行動し、離れないよう位置を保つ。"仲間"といることで、自分を確認でき、安心を得る。

ミカは先輩や友達の"仲間"といる以外に居場所がなかったのだろう。みんなが離れる、居場所を見失う、どうしたらいいか分からない、不安・恐怖……。"深い森の中"は現実の社会と同じ様なものか。

ミカの場合は"深い森の中"に立っていたが、人によっては"海のど真ん中"や"真っ暗な宇宙空間"にいるのかも知れない。

●ラストに登場する救急車

ナゼ救急車が!?　得体の知れない不安感をプレイヤーに与えるのが目的で、実は深い意味はないのかも知れないが……考えて見よう。

まず救急車はどこから来たのか。左から来たので、ミカの住む「ピラミッド御殿」からではないのか？　そう仮定しよう（それ以外の場所からとすると、お話しが始まらないので考えないことにする）。では乗せられている患者は誰か。考えてみると、マンションの住人で物語に登場する者は、ミカとミカの両親だけである。両親であれば、何か展開があるはず。しかしそれはないので、他の見知らぬ住人ということか。隣人が救急車で運ばれても、ミカにとってはどうでもいい……、知らない人だから、"仲間"じゃないから。

……あなたなら、このただの救急車を、どう捉えるか？

一つの解釈

前話では、コミューン内の人間との関係性なくして自己を語れないことを認識させられたミカだったが、今回はそんな自分そのものについて深く考えさせられる。

ミトラの登場により、空間的つながりがめちゃめちゃになった校内。ミトラの持つ特殊な能力を思い知らされるシーンだ。「プロローグ」や「夢題」では、3人の男女の死亡事件の時間的な連続を狂わせたり（誰がどの順番で死んだのか、その時間のつながりには矛盾が生じている）、死によって魂を時間的束縛から解放したり、と主に「時」に歪みを生じさせてきたミトラだが、今回は「空間」を歪ませている。このような一連の現象は、ミトラ自身が時や空間の束縛を受けない、超越した存在＝神であることを暗示するものと言えるだろう。

ミトラという邪神に翻弄され、ミカは森の中である光景を目にする。ユカリやチサト、そしてクラスメイトが楽しそうに語らっている光景。誰ひとりとしてミカの不在に疑問を持たず、ミカなしでひとつの輪として完結している。群れていたい、その気持ちのみで形成されたコミューンは、自分以外の誰かが欠けても成立してしまう。自分の周囲に不特定の誰かがいさえすれば、それで満足なのだ。前話では友情、助け合いの心を再確認したミカだが、この映像によって、友愛の対象が必ずしもミカでなくても、輪の中の誰であってもよかったということを思い知らされ、愕然とする。自分の孤独さをつきつけられ、自らの存在までも否定されたミカは、無意識のうちにみんなを抹消しようと試みる。それがミカが見た、ナイフを手にした自分の姿だ。細分化されたために、より強固なつながりを持つコミューン。そこからつまはじきにされた彼女は、コミューン自体を無化させることで、自分の存在を確立させようとしたのだろうか。他者との関係においてしか、存在し得ないミカたち世代の不安定さが浮き彫りにされる。

しかし、彼女はそんな自分の暗部を認めることができない。自らの深奥に隠された邪悪な意志に、彼女は底知れぬ恐怖を感じる。絶叫とともに現実世界に引き戻されるが、毒々しい光景ははっきりと脳裏に刻まれた。忍び寄る影は、ミカ本人の中にも存在していたことを、彼女は実感する。

概要

ミカの住むマンションの横にある団地で、飛び降り自殺が多発している。そんなウワサを聞きつけたミカは、原因を究明しようとアリサたちと行動を開始した。先に団地に到着したミカは、単身団地に乗り込んだ。前に現れたのは、3人の中学生。彼らとの会話から、事件の裏にはリルという黒幕がいることが明らかになった。

一方、遅れて団地に到着したアリサは、ナナという少女に出会った。次はナナがダイブする番……。泣きくれる彼女を守ろうとアリサは固く決意するが、ミカと二人で彼女を助けに行ったときには、既にナナは姿を消した後だった。

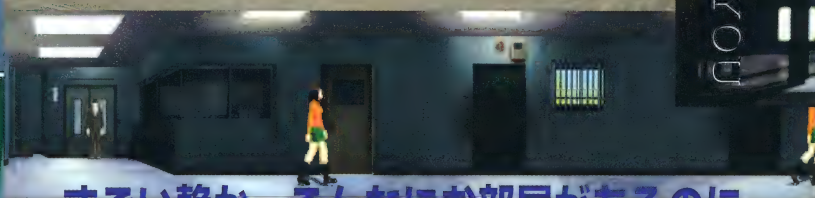
浮誘

FU YOU

その頃ユカリとチサトも、ミカを案じて団地に向かっていた。しかし、そこで遭遇したヤヨイの超能力によって、ユカリは屋上へ飛ばされてしまった。
　ユカリは飛び降りる寸前のナナを発見した。ナナはユカリの制止を振り切り飛び降りるが、彼女を想う団地の少年によって、一命を取り留めた。

黒幕・リルの居場所を突き止めたミカは、彼女から飛び降り——ダイブをする訳を聞いた。ダイブは、居場所のない自分達の世代の最後の表現手段……。そしてリルは、自分は黒幕などではなく、シンボル的な存在でしかないことも告げた。一連の集団自殺を止めるには、自分が最後の犠牲者になるしかない。リルはそう言って、屋上から飛んだ。

その頃、帰宅途中のリルの父親が下を歩いていた。リルの身体は父親の上に落ち、リルは死を免れた。あまりの偶然に作為を感じたチサトはヤヨイを問いつめ、それが白髪の少年とヤヨイの仕業であることを知った。怒ったチサトは、ヤヨイを封じ込めようと秘めた力を解放した。

なにやってんだよ
こんなところで
なに、このオンナ……
…興味本位で観にきてるのよ
なんでもとびつく バカな世代
だから
浮誘
FU YOU
“違う世代”
“死体チョーク”を眺めていると、何処からともなく3人の中学生が現われる。彼等は一様に自分達のことを話したがらないが、対応次第で少しだけ、内部事情を話してくれる。何にせよ物語の進行に差し支えはないが。
…すごい静か　こんなにお部屋があるのに
…死んだの
次はナナの番…

団地の捜索

ミカはリルという黒幕を追い、A棟の団地を捜索する。外から見て明りがついている部屋を当ってみる。下の階から順々に、最上階10階まで調べるが、リルはいない……。果たして騙されていたのだろうか？

●なぜ9つしか部屋がなくて10号室？

写真を見て欲しい。1フロアの部屋の数は10ある。当然、110号室は一階の10番目の部屋のはずだが……。実際、団地内に入り数えて行くと、9番目までしか部屋がない。どういうことか。

考えて見ると、“4号室”という部屋は“死に通じる”ということで、存在しない場合が多い。“3号室”の次は“5号室”になっているのである。よって、1フロアの部屋の数は9。“10号室”が9番目の部屋なのも頷ける。しかし、団地の外から数えると、部屋は10コ……。何か、オカシイ……。

●ヤヨイとチサトの正体

お久しぶり、姉さん……。ヤヨイとばったり出会ったユカリとチサト。そして始まる意味不明な会話。このエピソードで始めて、チサト、そしてヤヨイが人間離れした謎の能力の持ち主であると判る。この二人は一体何者か？　そもそも人間なのだろうか？

ちなみに白髪の少年が人間ではないということは、「エピローグ」で明らかになる。そして、そのエピソードで白髪の少年――ミトラが、チサトに対して言う言葉……。

……どれくらいぶり？　冴えない格好してお前らしくもない……。

チサトは18歳である。そのチサトに対して“どれくらいぶり”とは、“何年経ったか忘れた”ような言い方をするとは、どういうことだろうか？　まぁこれはミトラの言葉の“あや”なのかも知れないが、その後ミトラの頭を半分吹き飛ばす能力、そして死してなお幽体となって動けるその力は、人間とは思えないものでものであろう。

エピソードの最後、チサトとヤヨイは壮絶な超能力合戦を繰り広げる。二人が発するエネルギーの形は、まるで“天使”のようである。……天使なんだね、きっと　わたしの事、迎えにきたんだ　ありがとう……。

（ところでエピソード終了時の月の映像に、一瞬謎の映像が混じっていた（右下写真）。一体これは？）

一つの解釈

人はいつでも自分、そして自分たちが形成するコミューンの居場所を求めている。リルたち中学生世代の行動も、その思いに基づいている。彼女たち中学生世代は、団地内の分断された時間の中で、自分たちが生きることのできる時間を見つけようとしている。朝はそれぞれの時間、昼は主婦と子供の時間、深夜はミカたち高校生の時間。小学生は団地の一室に閉じこもり、テレビゲームの仮想世界に潜り込む。中学生に残されたのは、月が出始めるすきまの時間だけだ。そのため、リルたちは新しい時間と空間の確保をめざすレジスタンスとして、集団飛び降り自殺を決行する。団地の歴史を塗り替え、今ある生態系にくさびを打ち込むのが彼女たちの目的だ。その行為は自発的なものであり、誰も止めることができない。

ミカは団地中を駆け回った末、ようやくリルを探し出す。しかし小さな集団の中で刹那の快楽だけを貪るミカたち世代には、彼女の意図が理解できない。そのうちミカたち世代も居場所がなくなるとリルは警告するが、現在しか見ていないミカが、それを聞き入れることはなかった。ミカとリルとは最後まで分かり合うことができず、話し合いを放棄したリルは、ミカを眠らせ最後のダイブに向かう。実年齢こそ数歳しか離れていないが、世代間の溝はついに越えることができなかった。ミカたち世代がいかに閉鎖されているか、そして他世代との断絶に、いかに無自覚であるかを暗示するシーンだ。

また、このストーリーの中では、ミトラとヤヨイ、そしてチサトの関係についても興味深い描写がなされている。ここでは3者がみな、人間を超越した存在であることがわかる。雛代町の揺れを関知し、降臨した契約の神・ミトラ、「こちらの世界」の守護神たるチサト、中立をうたいつつもチサトに敵意をむき出しにするヤヨイ。終盤、チサトはヤヨイを封じ込めようと対峙するが、その力は拮抗しており、チサトの思うようにはいかない。「彼を抑えることはできない」というヤヨイの言葉を証明するかのように、ミトラはその勢力を増していく。中学生世代の葛藤をよそに、テレビゲームに没頭する小学生、その歪んだ姿にミトラは満足げな笑みを浮かべる。もはやチサトひとりの力では、どうすることもできない。

電破

概要

ユカリを誘い、クラブの「ドリームハンク」というイベントに出向いたミカ。

長時間爆音にさらされたせいか、それ以来、耳鳴りに悩まされることになる。

いつもならすぐに治まるのだが、今回に限ってそれはいつまでたっても治まらず、眠ることもままならない。

しかもその音は日増しに高まり、あげくは別のノイズや人の声、自分への悪口まで聞こえるようになる。

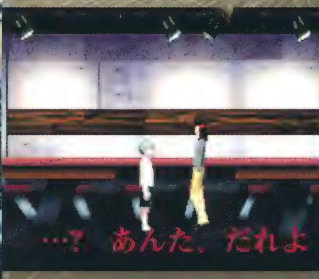
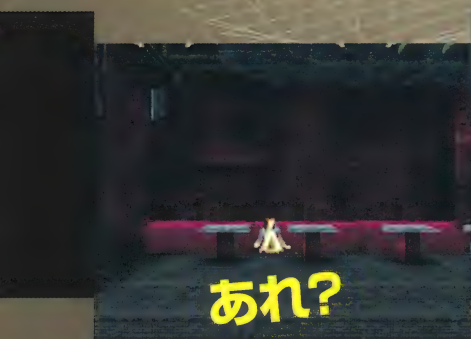
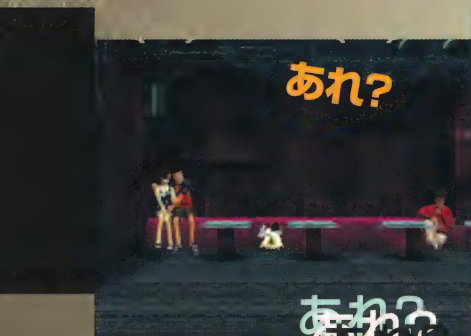
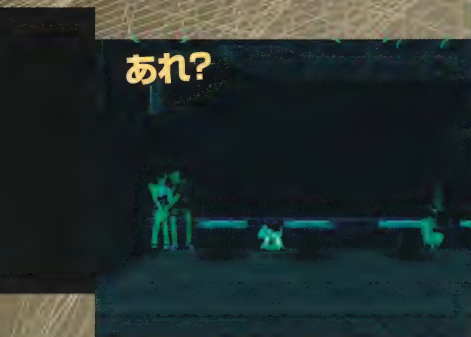
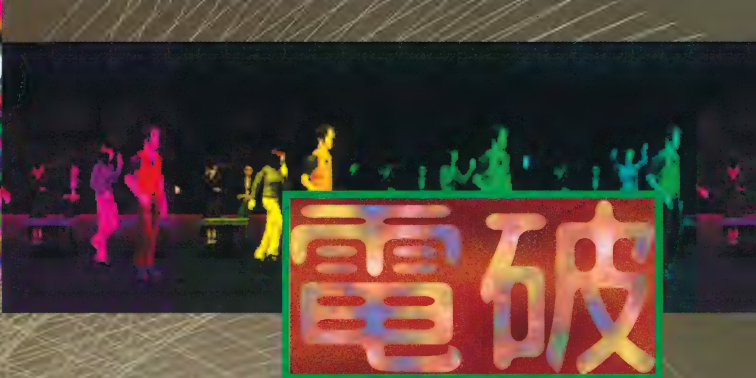
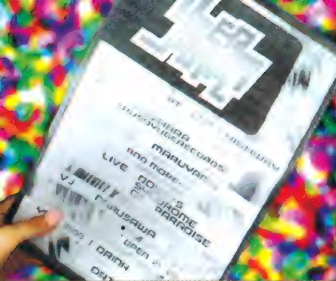
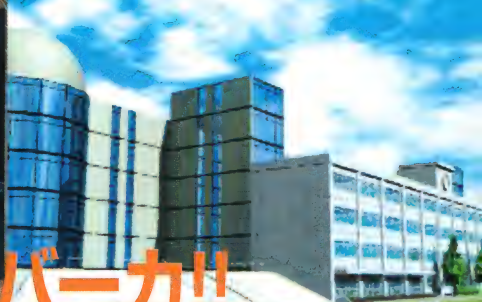
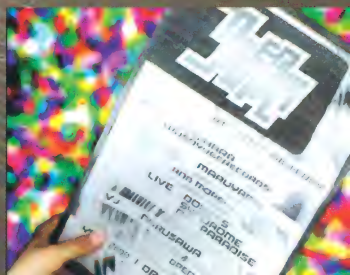
不安感にさいなまれるミカだったが、精神的に追いつめられる寸前で、その夢はさめる。目覚めるとそこはクラブ。

一緒に来たはずのユカリはおらず、ミホが別のフロアで待っていた。強烈な既視感を感じながらもその日はとりあえず帰途につく。

そのまま自室で眠りにつくが、目覚めるとそこは教室。ミホとクラブに行ったことも夢だったようだ。

目が覚めても
耳鳴りはまだ続いており、
保健室に向かうが、
今度はミカ自身が
わけのわからないことを
口走るようになっていた。

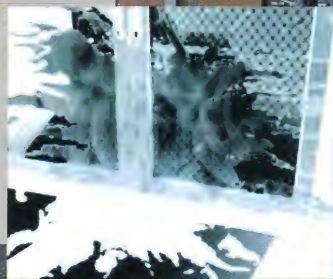
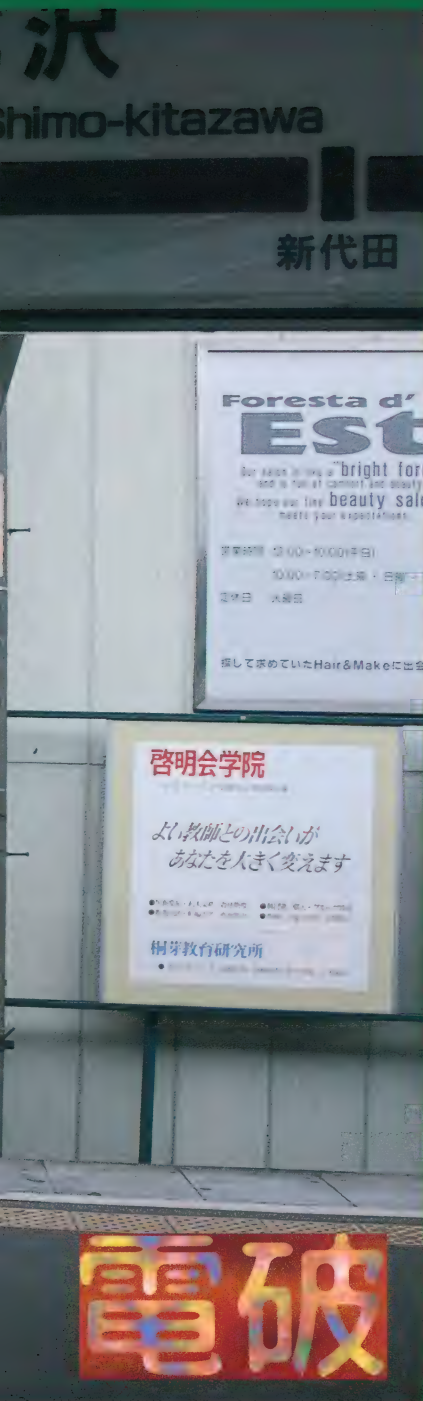
ミカの精神は限界を迎え、
ついに失神する。
しかし、気がつくとそこは無人のクラブ。
見覚えのある白髪の少年が、
ミカを待ち受けていた。

すべては彼の仕業だと知ったミカは怒りを覚えるが、
彼に攻撃を仕掛けようとした瞬間、
時は止まり、逆にミカが倒れてしまう。
気がつくと自室で寝ていたミカ。
一連の不思議な現象は、
すべて夢だったのだろうか……。

電破
あれ?
センパイ、
ごめんなさい
あれ?
センパイ、
ごめんなさい…?
あれ? これ前もなかったっけ?
あれ?
…? あんた、だれよ
夢……?

あんな音楽聴いているからだよ
バーカ!!
変なのはオメーのアタマん中だろ・・・
校内
学校では授業が終了するごとに5分間、休み時間になる。休み時間内は何をするのも自由。友達とおしゃべりするのも、外に出てエスケープしようとする(できないが)のもOKである。ただし、5分間経つと強制的に教室に戻されてしまう。
キシイさん……
5000円でいいんだって?
でェもやるンだョお～
私の家族、
衛星犯罪のトリコじかけでね
今度、
湘北にビラまきに行くの
誰だよ、ふざけんなよなぁ～
先生、三脚男子が、きわほうが
私ののうしんぼうを生きるんです。
どうして私の右が
先生にとっての左なんでしょうか?

●飲酒なぞはもはや当然

何か飲みます？　そうだなぁ……、と、何気なくことが進むが、彼女等は高校生。飲酒は勿論、法律で禁止されている。未成年者の飲酒、喫煙は年々増加して、都市圏ではもはや“暗黙の了解”の域まで達している感がある。いわば、“制限速度を守って走っている車は無い”程度の法律違反まで堕ちてしまった。大体警察もそれどころではない。麻薬、ドラッグ、売春、もはや何でもアリのこの状態、酒や煙草ごときを摘発する余裕はとてもないのである。このシーンはそんな日本社会の1ページを覗かせてくれる。時代と共に人々の価値観は変わり、常識も変わる。変わらないのは法律のみか……。願わくば、いつの日か「こんな時代もあったね」と言えるよう。

●生物室で見たものは…

生物室で、生物の先生と保健の先生が密会している……。ミホからウワサ話を聞き生物室へ行くと、一瞬、何かが見える。

見えたものは写真の通り。「エピローグ」で見ることになる、ユカリの血飛沫である（モノクロ）。なぜこんなものが見えるのか、それは、このミカの夢を紡いでいる白髪の少年——ミトラにしか解らない……。

一つの解釈

クラブの爆音やライブハウスでの大音響に長時間さらされた後、耳の聞こえが悪くなることはよくある。このまま耳が聞こえなくなったら……、そんな脅えを感じることも珍しくはない。また、ふと目覚めたときの夢と現実の境が見極められない不安感、自分がどこにいるのか瞬時に判断できない茫洋とした感覚、これも経験した人は少なからずいると思われる。「電破」は、日常しばしば体験するふたつの不安を増幅させ、底知れぬ恐怖を味わわせるシナリオである。

最初の舞台はクラブ・ロストハイウェイ。「夢題」においてスミオに弱者呼ばわりされたリョウが、逃げ込んだ先もここであった。ネガティブな思想が渦巻き、反復するテクノのリズムにあおられるかのように、ひとときの狂宴が繰り広げられる。場の持つ独特の澱んだ空気、毒気に当てられ、ミカの精神は錯乱し始める。

次の舞台は学校。日常的な世界に異物が入り込み、その波紋は徐々に広がり行く。ミカの耳鳴りも日を追うにつれ激しくなり、妄想電波まで受信するようになる。電波は次第にエスカレートし、果ては自分でもよくわからないことを口走るようになる。聞こえないはずのものが聞こえ、見えないはずのものが見える。しかし、それと反比例して、目に映るものは現実味を失い、夢の世界と同じぐらいのうすぼんやりとした輪郭しか持たなくなる。何にリアリティを求めてよいのかわからぬまま、ミカは現実と夢との狭間を行き来する。

「自分はここにいる」という確固たる認識は、日常では意識しないほど当たり前のことだ。しかし今のミカにはそれさえ確認できない。夢かうつつか。今、見聞きしているものは果たして現実か、それとも妄想か。何ものにもはっきりした手ごたえを感じとることができないミカは、現実世界と夢とを往復するばかりだ。「片倫」、「浮誘」でコミューンを否定されよりどころを失ったミカは、この事件によって自分という存在の不確かさにも気づかされる。体を支えていた基盤は、足元からもろく崩れ去り、ミカはまっすぐ立つことすらできない。ミトラの登場により普通の生活に戻ることはできたものの、それはこの体験を経る前の生活とは違う。一度感じてしまった不安定感は、ミカの心に巣くって離れない。ミトラの策略はその意図を果たし、ミカの精神は徐々に蝕まれていく。

開扉

概要

雛代台。
ミカとアリサは
地下鉄の駅で待ち合わせていた。
故障中の知らせが入ったにも
関わらず、じきに電車は発車した。
ひとしきりおしゃべりを楽しんだ後、
二人は睡魔に襲われ
眠りに落ちた……。

何者かの気配を感じて
ミカが目を覚ますと、
白髪の少年が立っていた。
面白いもの、見せてあげる。
少年は、
いたずらっぽい笑みを浮かべ
ミカに
人々の心の世界を見せた。
サラリーマン、
若いカップル、
老婆、
青年……、
車中に居合わせた人々の内面を覗き、
その醜悪さに、
ミカは幻滅と絶望を
感じずにはいられなかった。

ひとりだけ
心が読めない男がいた。
華山リョウ。
眠るように目を閉じた彼の心は
静かで、
何も語らなかった。
淵に引きずり込まれるように
ミカが眠りについた後、

白髪の少年と
リョウは
対峙した。
静かにさせておいてくれと
願うリョウに、
少年は自分とリョウとの間で
交わした契約をちらつかせた。
少年は、
ミカにしたのと同様に、
今度はミカの内面を
リョウに見せつけた。
彼女に特別な思い入れを抱いていた
リョウは、
スミオ一色に染まったミカの心の内を
見て、愕然とした。

少年は、半ば精神が崩壊したミカを
別の世界へと誘った。
少年に導かれるまま、
ミカは光の奥に
吸い込まれるように去っていった。
行くな!!
リョウは目覚め、
今は亡きキョウコに、
彼女を助けることを誓った。
アリサが深い眠りから覚めると、
ミカは
姿を消していた。

ここは……雛代台。
故障により止まっていた電車が
ようやく動くと告げる
アナウンスを聞き、
アリサは
呆然とした。

なんとガメラが

物凄い大きさの直径20キロの

ガメラが、東京タワーの頭上に

現れて

元気玉

発射するの

いつでもね、ミカは

「あたしら」って話すの

今は「あたし」って言った……

立派な成長だよ〜、ミカ〜

お乗りのお客様は

閉まるドアにご注意下さい。

開扉

駅構内

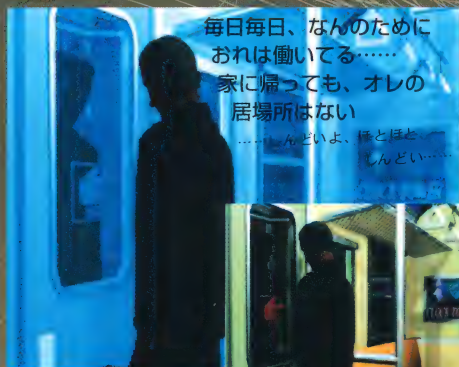
電車が到着するまで、駅構内をうろついてみよう。清涼飲料水の自販機で、ジュースを買うのもいいだろう。また、駅の端っこでは、ミカの隠された一面（?）を見ることもできるだろう。そうこうしているうちに、電車は到着する。

まもなく

1番ホーム、ドアが閉まります。

かけこみ乗車は危険ですのでお止め下さい。

とっとと
広げるもん
広げろよ
こっちは大魔王
抑えるのに
大変だ

広がって、目的
一直線じゃん
すげー
恥ずかしい
付けよ、
別れたいのに

人の内面

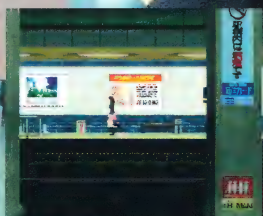
少年によって、ミカは人の心の内側を覗けるようになる。人々の心は、ことごとくミカの期待を裏切るものであった。それは、"たまたま" なのか、本当なのか、ミカから見て "本当" なのか……。

人間の心の内側、こんなに愉快な遊びはなかなかないよ

ほら、あの光 さあ、ミカ……一緒に行こう

●いくぞ、ドライブシュート!!

駅の左端に行くと、いきなりミカのドライブシュートが炸裂する（といっても凄いのは音だけ）。しかも、声は突然アニメ調。しかし、このセリフどこかで聞いた様な……。

なんだ!? と、思われた方も多いはず。しかしこれには意味があるようだ。物語を最後までプレイし、スタッフロールをよく見てみると……。白髪の少年……声……サッカー漫画……ドライブシュート……？

●アリサの夢の諭しているものは？

アリサの夢は難解である。キーとなっているキャラクターは「ダイゴ」。彼は夢全体を通して登場しており、アリサ曰く“矛盾の象徴”である。なぜか。

夢は分析すると、1. 事件、2. 経過・結果、3. ダイゴが……、の繰り返しになっているようである。1. ゴジラに襲われ、2. ティガが駆けつけ、ガメラが解決、3. 実はダイゴのジオラマ。1. 動物園のオリにいて、2. 流れて、ドラえもんに食べられ、3. ダイゴが殺す。……そして一番最後は、これら世界をダイゴが食べる。

どこまでいっても、ダイゴにひいきな夢なのである（なぜひいきするのか、アリサがダイゴのファンだからである）。ガメラが地球を破壊したときも、動物園がドラえもんに食べられたときも、その場所にいたはずのダイゴは、その場所を包括するさらに大きな“くくり”におり、どうなってもダイゴがやられることはない。そしてダイゴに対するひいき（アリサの願望＝真実）を通そうとするばかりに、周りのものは歪み理不尽な世界（矛盾）を造り出してしまう。真実を通せば丸く納まる訳ではない、真実は矛盾を生み出す……？

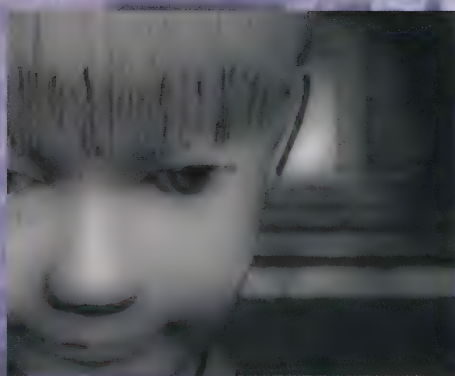
これは、白髪の少年――ミトラがミカに見せる4枚の映像の意味と似ている。“英雄”は“人殺し”でもある……。そして、この物語にも矛盾があるのか……。

一つの解釈

いよいよミカの精神が壊れゆくときが来た。これまでの奇妙な体験で、仲間も自分自身すらも信じられなくなっていたミカは、ここに来てついに自我を崩壊させる。そして、ミトラの誘う世界へ引き込まれていく。

好奇心旺盛なところが魅力だったミカも、ここ最近の経験にはこたえている様子。面白いものを見せてあげる、というミトラの申し出にも気弱に首を振るばかりだ。彼女の意向など無視し、ミトラは車中に居合わせた人々の心を見せつける。いびつにふくらんだ野心、むき出しの欲望、病み疲れた精神。そのあまりの醜さ、痛ましさにミカは愕然とし、人々に対する不信感を強くする。もう信じられるものなど何もない。早くここから抜け出したい。そんな心から、ミカはミトラの後を追い、光の中＝別世界へと旅立ってゆく。

一方、リョウもミカの内面を見る羽目になる。彼もまた、執拗なミトラのいたずらに心を病んでいた。疲れはて、静かな生活を望む彼だが、ミトラは彼に鞭をふるうのをやめようとしない。そして、リョウはミカの内面を見ることになる。彼女に並々ならぬ執着を見せていたリョウだが、彼女の空虚さやスミオとの過去を知り、ショックを隠しきれない。揺れ動くリョウの精神を支えたのは、今は亡きキョウコ。リョウはキョウコの幻影に、ミカを守ることを誓う。そして、その使命を自分のよりどころにし、精神の崩壊を食い止める。ミカの旅立ちを止めることはできなかったものの、まだ遅くはない。リョウは、ミカを取り戻す決意を新たにする。

ミカとアリサが乗っていた故障車両は、現実世界と異空間とを仕切る扉だったようだ。ミカは扉の向こうに消え、事件に気づかなかったアリサは現実世界に踏みとどまる。不安定に揺れ動くミカだけが扉に気づき、確固とした自分を持つアリサには、扉は見えなかった。また、アリサはミトラが誘ったところで、扉を越えることはなかっただろう。精神的に追いつめられていたミカだからこそ、越えてはならない一線を越えてしまったのである。こうしてミカは、現実世界から姿を消すことになる。

概要

ミカ失踪から数日後、ようやく異変に気づいたユカリは、アリサと共にミカの捜索を開始する。すると時を同じくしてミカの友人、ミキが体育館の工事現場で、瓦礫の下敷きになって死亡していたことが判明。そんな中、追い討ちを掛けるようにミユキ、カヅキら同級生が立て続けに殺されていった。

いよいよ焦ったユカリたちは深夜の学校に集まり、真相究明に乗り出した。ユカリたちと別れたアリサは、生物室で、ミホの死体の傍に立ち尽くす広瀬と遭遇した。広瀬はアリサの姿を認め、当惑したようにゆらゆらと近づいた。そこヘタイミング良く巡回の警官が乗り込み、広瀬に向かって銃弾を発射した……。
　こうして事件は解決されたかのように見えた。

チサトはどこか腑に落ちないものを感じ取っていた。チサトは校舎の構造に不審な点を発見していた。ユカリと共に探索を進める内、校長室に隠されたエレベーターを発見。それに乗り、秘密の部屋に達した2人が目にしたものは、継ぎはぎだらけの死体標本だった。

言い知れぬ邪悪な影を感じた2人は、脱出を試みるが校長室の扉にはいつの間にか、錠がかけられていた。そこへ現われたのは……
　校長だった。すべては彼の仕業だったのか。狂気の笑みを浮かべ[illegible]にじり寄る校長。と、突然、間一髪のところで校舎が瓦解し校長は眼下に墜落していった。ユカリとチサトは助かったのだ。

雛代高校連続殺人は、幕を閉じた。しかし、[illegible]は依然として掴めないままであった……。

この間の事故のことか
旧体育館の解体作業中にウチの生徒が
瓦礫の下敷きになってな
即死だったらしい…

慟悪

その香坂ミキが
死んだらしい……

え?
カヅキが
死んだ……

ミユキ!?

これ、血!?

見かけましたよ、
たしかにミカですよ、
あれは

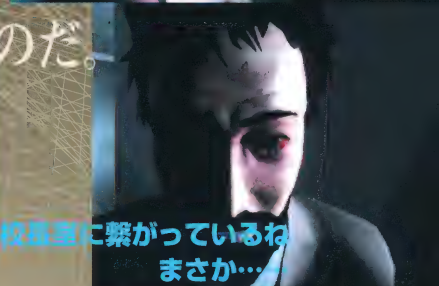
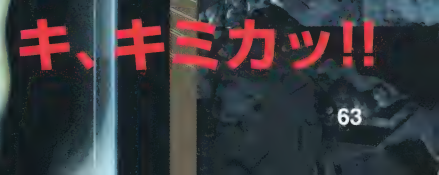
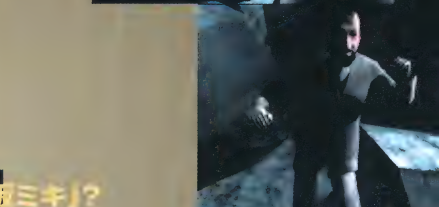
ミカが
行方不明?
また授業サボって
どっか
遊びに
行ったんじゃ
ないんですか?

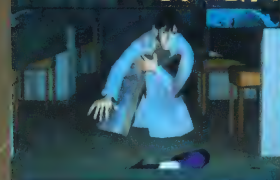
ミカの手がかり

ユカリとアリサは、どうも行方不明になってしまったらしきミカの身辺調査を開始する。手がかりから手がかりへ、捜査を進めるうちに、思いもよらない事実が見えてくる……。

化学室

喜びたまえ　君は
私のすばらしい
芸術作品の
一部となり
生まれ変わるのだ。

これ、校長室に繋がっているね
まさか……

「香坂ミキ」？

キ、キミカッ!!

夜の捜査

チサトは校舎外を、アリサは1階と地下を、ユカリは2階以上を手分けして探索することに。探索は1フロア単位で行ない、全ての扉、廊下を調査した時点で次のフロアに移れる。

●広瀬と校長の結託？

生物室。ミホの死体の傍に立ち尽くす広瀬。ち、違う、俺じゃない、俺じゃないんだ――そして広瀬は射殺された。ミホは、広瀬に殺された。準備室には広瀬が女装に使ったと思われる衣装が落ちていた。ミカの姿は広瀬の女装だったのか。カヅキもミユキも広瀬に殺されたのだろう……。

しかし、これは真実なのか？　広瀬は最後まで懇願するように、違う、と言い続けた。そしてチサトが言っていたように、タイミングよく現われた警官。まるで“チャンスを窺っていた”かのようである。女装の衣装も直ぐに発見できる場所にあった。ち、違う、俺じゃないんだ――広瀬こそ“被害者”ではないのか……？

以前から、いろいろ問題のあった広瀬。彼が宿直の日に限って、事件が発生。そして最後に全ての罪を背負って彼は死んだ。それを見て微笑んだのは、校長だった……のかも知れない。

一つの解釈

ミカが姿を消した後の第9話「慟悪」は、前8話とは趣を異にした展開を見せる。ミカ失踪後、雛代高校を襲う連続殺人事件、その真相を描いたサイコホラーだ。

ミキ、ミユキ、カヅキ、ミホ。学園ミステリーのようにミカの級友たちが次々と殺害され、学園は混沌とした様相を呈する。ユカリたちは捜査を進めるも、先回りをするように事件が続発する。学園内のできごとはすべて監視カメラに収められ、生徒に関するデータも掌握されている。映画『硝子の塔』を思わせる視線の脅威、プライバシーの迫害は、現在の管理教育を揶揄するかのようだ。しかもこれらすべては、雛代高校校長の手によるものだった。全生徒の名前と顔を把握していること、いつも優しい笑顔を絶やさないこと、心霊事件で志望率の低下した高校をエリート校に仕立て上げたこと。生徒たちに全幅の信頼を寄せられていた校長の、狂気に満ちた一面。人の心に棲む「魔」の存在に、ぞっとせずにはいられない。何気なく通っていた日常生活の場が、思いがけなく恐ろしいものだったことを知り、ユカリたちは恐怖におののく。

とはいえ、この一連の事件にもミトラの邪念を感じずにはいられない。人の魔を引き出すことを得意とするミトラは、校長をもその毒牙にかけたのだろう。不安定に揺れる雛代の地につけ入り、いたずらに人の心を刺激する。そんな彼だからこそ、雛代に忍び寄る影を実体化させるために、校長の心の魔に入り込んだのだ。継はぎだらけの死体像に高橋キミカ(彼女の死にはミトラが関係していると思われる)の頭部が使われていたことからも、ミトラの関与が想像できる。

『トワイライトシンドローム』で、異常なほど心霊事件が頻発し、邪念の渦を感じさせた雛代高校。この場の持つ特殊な磁力も、事件の発生に少なからず影響を与えているに違いない。揺れる雛代の地で心の魔を目覚めさせ、雛代高校という邪念の渦巻く場所で、狂気を増幅させる。それを引き出したのがミトラだとすれば、校長もまた事件の被害者と言えるかもしれない。真相はわからぬまま、彼は闇へと葬られる。

エピローグ

概要

その日、チサトはミカの気配を感じとった。
戻ってきたよ、ミカちゃん……。一縷の望みをかけ、必死の思いでミカを捜す3人。しかし白髪の少年――ミトラの手に掛かり、彼女等は無残にも殺されていった。

戻れたのか……。
その頃、リョウもミカの帰還を直感していた。
ルミやヤヨイの制止を振り切り、リョウはミカの気配を追った。
殺されたチサトは霊魂となってリョウを導いた。
行き着いた部屋でリョウは一振りの刀を手にした。

自分の手でピリオドを打って。あなたならできる。
そう言い残してチサトは倒れ伏した。リョウは力強く刀を握りしめる。
自分にしかできないこと、
自分の生きる価値を初めて見い出したリョウは、
ミトラとの対決を決意した。
そこへ……ミトラが雷音と共に現われた。

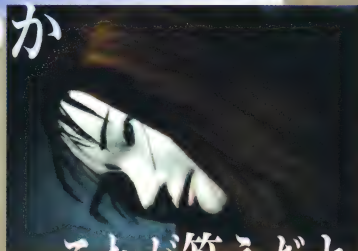
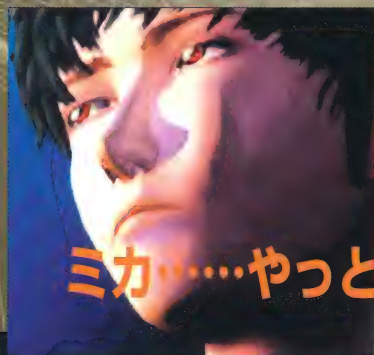
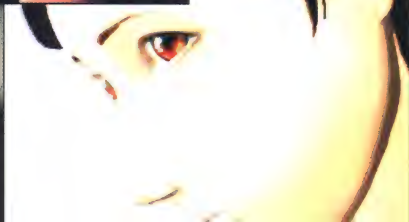
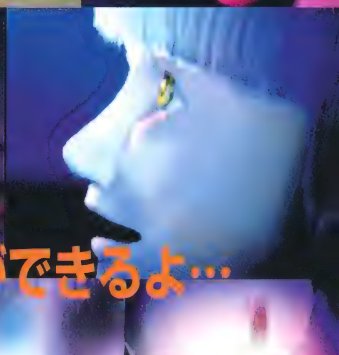
ミトラはリョウを言葉巧みに挑発した。
リョウは答える代わりに無心に斬りつけた。
ミトラの身体は細切れになり……、
ついには消え去った。
……これが答だよ。リョウの目には、
バラバラになったミカの身体が映っていた……。

……いつか見た青い空の下。
リョウは、ヤヨイ、スミオ、キョウコの姿を見つけた。
全てが解き放たれ、
澄みわたったこの世界で、
リョウはスミオ、そしてキョウコの呪縛から解放された。
リョウは自由を手に入れた……！

コンクリートの床には
刀を突き刺されたミトラの亡骸だけが残されていた。

ミカちゃん、戻ってきたよ
無駄だよ
ぼくが全部
ブチ壊してやるから
ユカリちゃん、
見ちゃダメ!!
エピローグ
ミカが呼んでるの……
ほっとけないでしょ

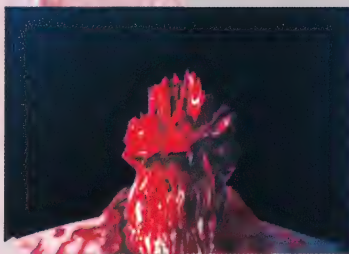
突入

リョウは、白髪の少年を求め校内をさまよう。一方、チサトは絶命しながらも精神は生きており、リョウを少年の元へ導くべく、動き出す。リョウは5階で会える。そして、リョウにメッセージを残し、チサトは動かなくなる。

●アリサはどうなった？

アリサは、白髪の少年を人間ではない、と見抜く。しかし、直後少年──ミトラによって殺されてしまうのであった……。

物語中では、はっきりと“殺された”描写はされていない。何かの炸裂音がし、アリサが倒れる音がするだけである。チサト、ユカリの場合もそうである。が、実はこの時アリサは、無残にも首を吹き飛ばされているのである。本来は写真の様な絵が挿入される予定だったらしいが……。

その後、ミトラはユカリに、アリサの付けていたアクセサリーを見せるが、本来はこれも“アリサの眼の周りの部分”（ヒューマン資料より）だった。

●結末

白髪の少年を倒し、リョウは呪縛から解放された。そしていつかすれ違ったあの川の土手で、リョウとミカは再会を果たす……Happy End。しかし物語はまだ続きがある。本書では、その部分には触れないことにする。リョウはどうなったのか、ミカはどうなったのか、一連の出来事は何だったのか……、続きの部分を見て、それが解る人もいれば、さらに“？”を増やす人もいるだろう。ただ、言っておきたい、決まった解釈などない。100人いれば100通りの結論があるだろう、『ムーンライトシンドローム』はそういう物語だと……。

一つの解釈

ミカの気配を感じたユカリたち3人は、吸い寄せられるように夜の校舎に集まってくる。しかしミトラの手により、ユカリたちはみな死に追いやられる。

一方、リョウも雛代高校に向かっていた。校門前ではルミに遭遇、冷たい態度しか見せなかった彼女がようやく心に秘めた暖かさを表に出す。友情など信じていないはずの彼女もミカの救出を祈り、リョウはその言葉から力を得る。そして校内へと歩を進める。

玄関先でユカリの死体を認めるものの、リョウはひるまない。「ルナティック（狂人、精神異常者）か」とつぶやくと、後は振り返らずに進んでいく。そして次に出会ったのはヤヨイだ。「私が守ってあげる」とキョウコと同じことを言う彼女に、「そういうのは終わりだ」とひと言告げるリョウ。誰かに守られる生活はもう終わり、自分ひとりで生きていくというリョウの決意が感じとれる。「夢題」でスミオに弱者呼ばわりされたリョウだが、様々な経験は彼の意識を変えたのだろう、もはやリョウは昔のリョウではない。

さらにチサトの魂との対話で、彼はもうひとつの真実に気づく。精神を蝕まれたミカの姿は、鏡に映った自分自身だったこと、ミカを守るために生きるつもりだったが、人は自分の中にしか生きる価値を見いだせないこと。こうして、弱者を脱却して確固たる自己の存在を認めたリョウは、ミトラとの対決に挑む。精神的な揺れのないリョウは、ミトラと言えど倒すことができない。リョウは、ミトラの背に長剣を突き刺す。ミトラは倒れ、そしてリョウはすでに冷たくなったミカの姿を目にする。ミトラもチサトもいなくなった今、後に残されたのは、中立を保つヤヨイだけである。こうして雛代町に巣くう「魔」は終焉を遂げた。

青い空の下、リョウが出会ったのはスミオ、ヤヨイ、そしてキョウコだ。リョウに執着すると言い残して死を遂げたスミオは、「これも意味を変えた愛の形」とリョウへの呪縛を解く。そして、キョウコはひとり立ちしたリョウを見、その強烈な愛の束縛から彼を解放する。リョウは、完全に自己を確立することができた。

白髪の少年の正体

白髪の少年の正体はゲーム中で明らかになることはない。しかし、『ムーンライトシンドローム』のパンフレットや関連資料等を覗くと判るが、彼の正体は、契約の神（天使）ミトラである。本書の解説ページ等でも、少年はミトラであるものとして語ってある。ところでミトラとは、どういう“いわれ”のある神なのだろうか？　このページでは伝説として伝わる“ミトラ神”についてを追求して見よう。

ミトラ　Mithra

ミトラ、ミスラ。ペルシャはゾロアスター教の神で、俗に“契約神”と呼ばれる・・・

ミトラ神について深く追求する前に、まずはゾロアスター教とは何か、軽く触れておこう。

ゾロアスター教は、紀元前6世紀、ペルシアに現われた宗教改革者、ゾロアスターが説いたとされる宗教である。その考え方は、全て二元論（善と悪）に基づいており、このゾロアスター教の出現によって、それまで語り継がれてきたペルシアのあらゆる神は、“善”の最高神アフラ・マズダと、“悪”の最高神アンラ・マンユ（アーリマン）の下に統括されることとなった。

善の最高神アフラ・マズダは全知の神であり、最高位を表わす意味で“主神”と呼ばれる。アフラ・マズダの下には“陪神（アムシャ・スプンタ）”と呼ばれる7人の神がおり、それぞれ“聖霊”“善視”“天則”“法則”“敬虔”“王国”“完璧”“不死”と名付けられている（名前は日本語訳のもの）。そして、時に彼等は“大天使”と呼ばれる。“陪神・大天使”のさらにその下には“天使（ヤザタ）”が位置している。

そして、ミトラ（ミスラ）は、天使・ヤザタの位にいる。要するに“その他大勢”の位置にいる、位だけ見れば大したことない神なのである。しかし、ミトラはゾロアスター教の発祥以前から存在した“古き神”であり、古代ではローマ、インド、イラン等の広大な地域で、広く信仰された神（その宗教は「ミトラス教」といった）であった。また、アケメネス朝の碑文には、アフラ・マズダと並ぶ三大神の一人（三大神のもう一人は、女神アナーヒター。ミトラと同じく、ゾロアスター教の登場後、天使・ヤザタの位に落ちている）と記されているように、当時は重要な人々の守護神であった。

ミトラ本人の話に移ろう。ミトラは、千の耳と万の目を持ち、万物に精通・熟知し、万の密偵を持って人間の行為を全て知る、と云われている。つまり“全知”の神と言ってよいだろう。さらに「ハラー山」という光り輝く山の住居に住み、あらゆる神々の中で最初にこの光り輝く「ハラー山」の頂きに立ち、人々（ここではアーリア人）と人々の住む土地全てを見渡すことから、後に“太陽神”と同一視されている。

このような“善”側の神であるミトラも、契約を破ったり、ミトラ自身を欺こうとしたり（そもそも“全知”の輩を欺けるハズもないのだが）する者に対しては激怒し、その国ごと滅ぼしてしまうらしい・・・。以上がミトラについての“いわれ”である（参考書：『世界の神話伝説』自由国民社・発行）。

さてここまで話して、初めて提示できる話題がある。

「開扉」でミカは何を見たのか

「正義の名の下に、侵略と略奪を繰り返す英雄。」
「神の名の下に、現世の富のみを集める宗教者。」
「愛の名の下に、快楽にふける男女。」
「死と破壊の上にそびえる、近代ビル群。」
・・・（ヒューマン資料原文まま）。

白髪の少年──ミトラが見せたものは“善人の悪事”であった。物事は言い方次第でどうとでも言える。英雄は“正義”とも“人殺し”とも呼べる。善と悪は表裏一体、あなたが、いい、と考えていることは、こんなに醜いことでもあるんだよ、ミトラはそう言いたいのだろうか・・・

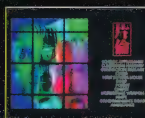
ミトラがこのような説得方法をとったのも、彼が二元論の上に成り立っている宗教、ゾロアスター教の神だったからかもしれない。

付録・物語に詰まった方へ

警告!!

これ以降6ページは
ソフトのシステム的な解析が掲載されています。その為、
『ムーンライトシンドローム』の持つ雰囲気、
あなたの感じている『ムーンライトシンドローム』のイメージが
壊れてしまう怖れがあります。

どうしても先のエピソードに進めなくて困っている方、又は
少なくとも一度はエピローグまでプレイされた方のみ、ご覧になるようお薦めします。

項目

奏遇	……	学校の構造がわからない	……	一枚めくって下さい。
変嫉	……	変質者から逃れられない	……	二枚めくって下さい。
片倫	……	子供を発見できない	…………	三枚めくって左ページをご覧下さい。
慟悪	……	調査の手順がわからない	……	三枚めくって右ページをご覧下さい。

雛代高校 構造図

雛代高校は昨年改築された。それというのも前作『トワイライトシンドローム』の一連の事件で雛代高校の志望率が激減し、校長が退任、新しい校長に替ったためであった。新校長はデンマーク経営学を導入し、ものすごい額の援助金を集め、校舎をハイテクなものに改築した（以上、クラブ「LOSTHIGHWAY」の客の話より）。

▲外観

ロビーの扉は通常開いていない。「慟悪」以降のエピソードでは、錠が外されている。

屋 上

北4Fへ→

北4Fへ→

R

北3Fへ→

WC

北3Fへ→

4F

北2Fへ→

WC

北2Fへ→

3F

北1Fへ→

WC

北1Fへ→

2F

北B1へ→

玄関

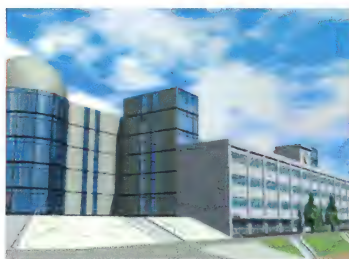
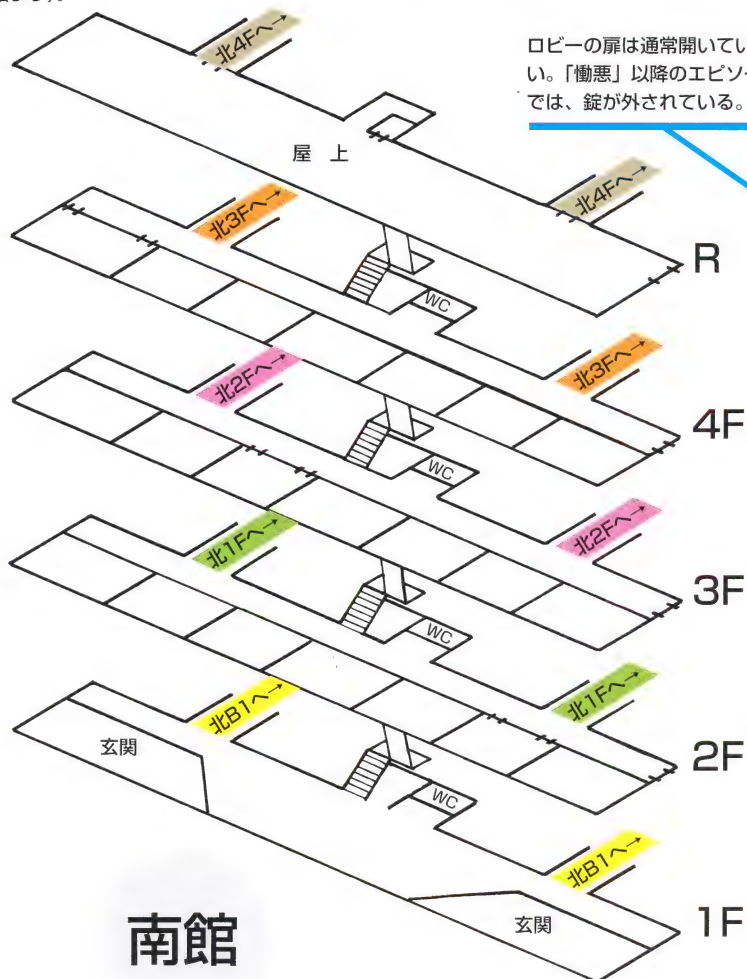
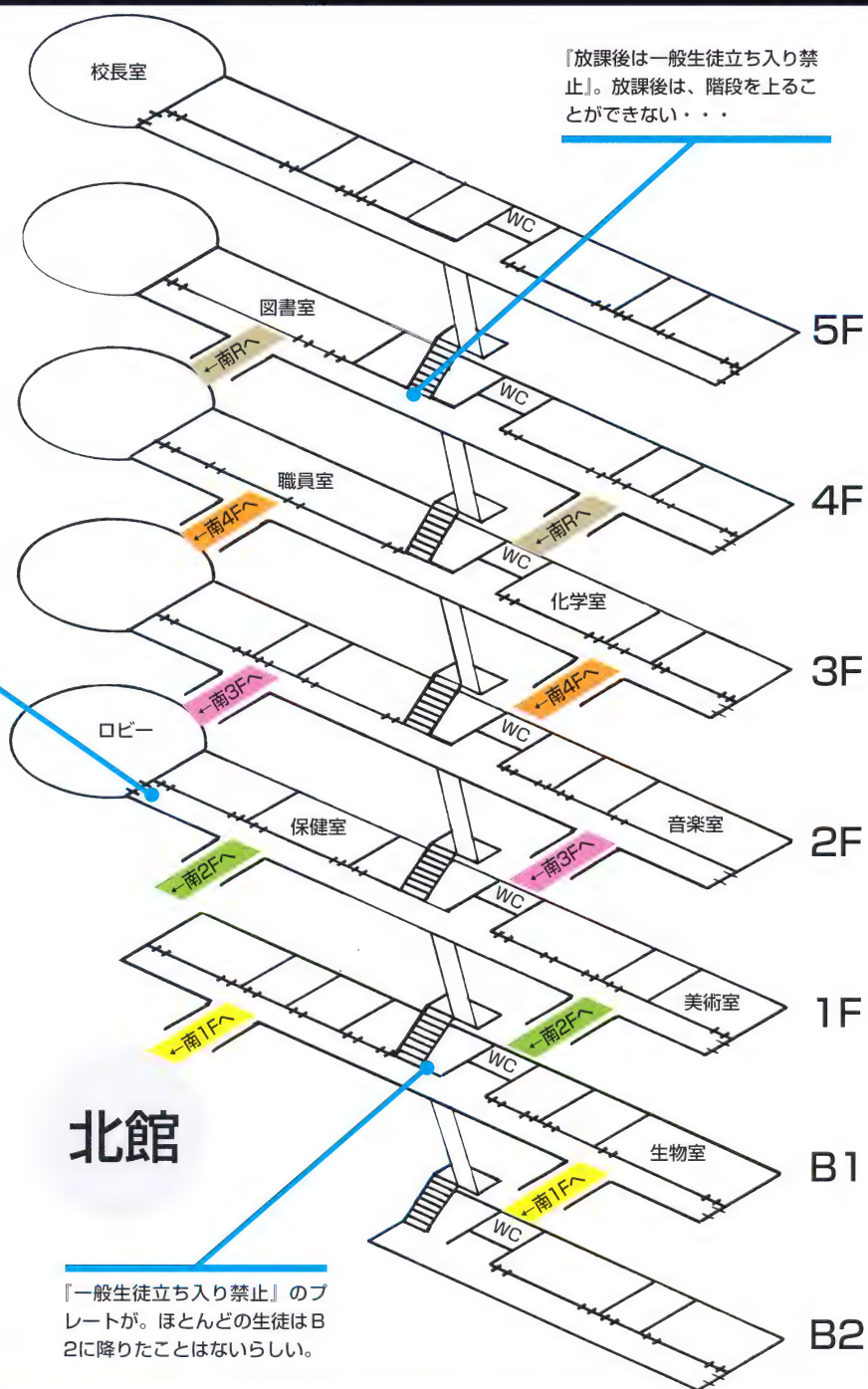
WC

北B1へ→

玄関

1F

南館

『放課後は一般生徒立ち入り禁止』。放課後は、階段を上ることができない・・・
校長室
WC
5F
図書室
←南Rへ
WC
4F
職員室
←南4Fへ
←南Rへ
WC
化学室
3F
←南3Fへ
←南4Fへ
ロビー
WC
保健室
音楽室
2F
←南2Fへ
←南3Fへ
WC
美術室
1F
←南1Fへ
←南2Fへ
WC
北館
生物室
B1
←南1Fへ
WC
B2
『一般生徒立ち入り禁止』のプレートが。ほとんどの生徒はB2に降りたことはないらしい。

変嫉者の会話メカニズム

彼らを怒らせないためには・・・？

霜北に向かう途中、不審な者達に絡まれるシーン。彼等を怒らせないよう、解答を選択しなければならない。以下は、彼等との会話のフローチャートである。何が彼等を怒らせてしまうのか、これで解るだろう。

ENTRY 1 浮浪者風の男

おい！　子供がどこへ行くんだ！
- ●相手にしない → クリア
- ●答える → ×

ENTRY 3 一方的な感じの女

わたしのベビー、何処へ行ったの？
あなた見なかった？
- ●逃げる
- ●見た
- ●見ていない

ENTRY 2 オタク風の男

キミ、女子高生？　アハ、アハ、アハ、アハ
- ●逃げる → ×
- ●話す →

交際しようよ、ゲーセンいってさ
アハハ
- ●逃げる → ×
- ●ゲームの話を聞く
- ●一緒に行く
- ●誘惑する

・・・アハハ　アーケードなんだけどさ〜
『マルチメディアファイター４』のプログラムをメインでやったのさ
- ●逃げる → ×
- ●マッハ蹴り → クリア
- ●バタフライキック → クリア
- ●ダイナマイトパンチ

何処なの？　何処へ隠したの？
●逃げる
●知らない
●答える　→クリア

何もしてやることができなかったのよ！
かわいそうだと思わない？
●思う　→クリア
●思わない　→×

・・・行かないでよ　どこ行くのよ！
見たんでしょ！　あなた！！
●逃げる　→×
●見た
●見ていない

・・・ミカ？　そうよミカちゃんよ
●嘘ついてない？　→×
●本当なんだ　→クリア

・・・そうよ、ユカリ！
ユカリちゃんよ
●嘘ついてない？　→クリア
●本当なんだ　→×

あなた知ってるんでしょ？
あのコの名前！
●知らない　→×
●ミカ
●ユカリ
●チサト

・・・それよ！　チサトちゃんよ！
●嘘ついてない？　→クリア
●本当なんだ　→×

捻じ曲がった校舎の構造

白髪の少年——ミトラの力によって校舎は、階段、廊下の繋がりが普通ではなくなっている。しかし、一見デタラメに繋がっているようだが、実はそれなりの法則が存在している。階段は、上りも下りも繋がっているフロアは同じ。二つある渡り廊下も、どちらも同じフロアに繋がっている。

それぞれの繋がりは下図を参照にして欲しい。図を見ると、実は全体の半分は一本道であることが判る。

		北5F
南R		北4F
南4F		北3F
南3F		北2F
南2F		北1F
南1F		北B1
		北B2

雛代高校校舎断面構造

南3F → 北B1 → 南R → 北1F → 南2F → 北2F

北2F → 南R（階段）、北2F → 南4F（渡り廊下）

南R → 北4F（渡り廊下）、南R → 南4F（階段）

北4F → 南4F（階段）、北4F → 南1F（渡り廊下）

南4F → 北3F（渡り廊下・階段）

北3F → 北4F（階段）、北3F → 南R（渡り廊下）

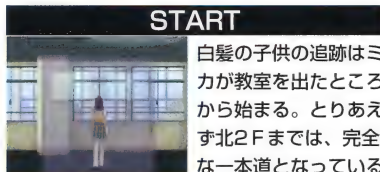
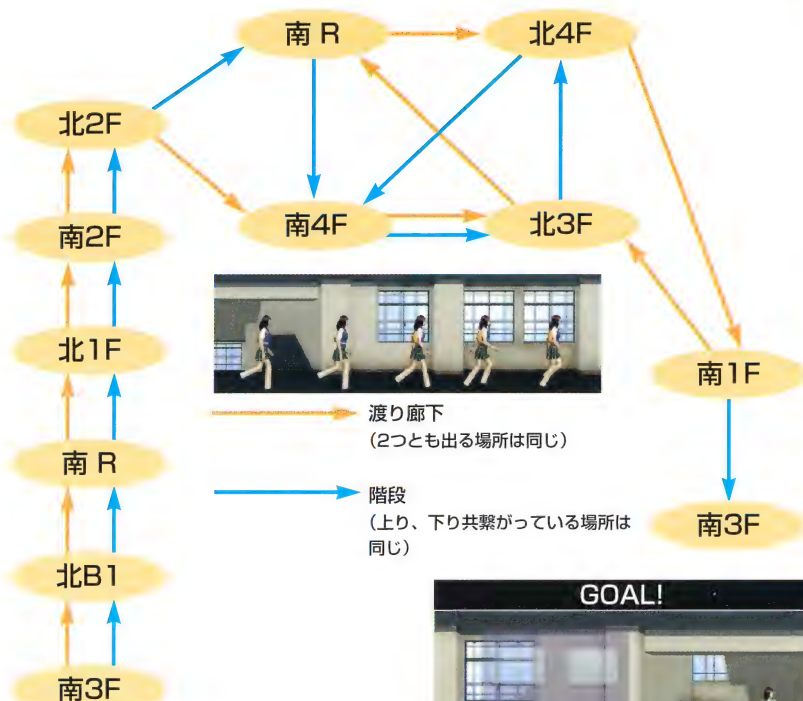
南1F → 北3F（渡り廊下）、南1F → 南3F（階段）

渡り廊下
（2つとも出る場所は同じ）

階段
（上り、下り共繋がっている場所は同じ）

START

白髪の子供の追跡はミカが教室を出たところから始まる。とりあえず北2Fまでは、完全な一本道となっている。

GOAL!

再び北3Fにたどり着くと、白髪の子供を発見できる。なお白髪の子供を見つけた後は、他のフロアへの移動はできない。

捜査手順

ミカがいなくなって何日か経った。ようやくユカリ、アリサは、流石におかしい、と思い始めた――
ミカの捜査は、ユカリが中心になって進められる。以下は、その捜査の手順である。これは物語を進めるための必要最低限のことしか載せていない。サブイベント等はあなた自身の手で探り当てて欲しい。

1 南3F　2−3（ミカの教室）へ行き、同級生Aと会話

ユカリとアリサは、ミカと親しいカヅキに話を聞こうと教室を訪れるが、
そこに彼女の姿はない。

2 南1F　ロビーへ行きカヅキと会話

最近のミカの様子を聞くが、ますます要領を得ない。
アリサはミカの自宅を当たってみることにし、
ユカリはカヅキを伴って校内で手がかりを探す。

3 南3F　2−3へ行き、同級生B、同級生Cと会話

話を聞き、ミカのろくでもなさを再確認する。
別の生徒から、先日校内で事故が起こり、誰かが死んだらしい、と聞く。

4 北3F　化学室へ行く

事故当日、宿直だった広瀬先生の話から、
亡くなったのは、ミカの友達のミキだと知る。

5 校舎外の天文台（玄関を出て左手）へ行き、ミユキと会話

翌々日、ユカリはカヅキが死んだことを知る。
さらに夜中にミカが学校近くを歩いていたという情報を入手。そのミカを見たという、天体観測部のミユキを当たってみる。

6 校舎外の天文台へ行く

次の日、姿の見えないアリサを捜し、
天文台へ行く。
そこで血を流し死んでいるミユキを発見する。

7 南2F　廊下でアリサと会話

アリサの身を案じたユカリだが、
彼女は学校で昼寝をしていただけだった。

そして数日後の夜、ミホの連絡を受けた
アリサ、チサト、ユカリの3人は、
闇に包まれた校舎を
捜索するのである・・・

Game Fan Books
ムーンライトシンドローム
ビジュアルガイドブック

1997年10月31日　初版第1刷発行

編著　株式会社毎日コミュニケーションズ
発行人　佐々山　泰弘

編集　株式会社ワークハウス
石田将隆（DEX）
猿又花子（H.R.）
編集補助　瀧田伸也

Design/DTP　株式会社ワークハウス
塚本緑樹　大神れいじ　山下幸雄

Illust Map　愛沢ひろし

Photo　MOTOKO（DEX）

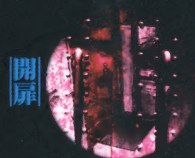
DTP出力　株式会社アイノグラフィックス

発行所　株式会社毎日コミュニケーションズ
〒100　東京都千代田区一ツ橋1-1-1
パレスサイドビル
TEL. 03-3211-2568
印刷/製本　大日本印刷株式会社

ISBN4-89563-862-6

本書は『ムーンライトシンドローム』という物語の理解の手助けをする、というコンセプトの下に制作されました。いわゆる“攻略”的なページを少なくし、イメージ的なページを増やして、編集されています。本書の文章・イメージ画像は、編集側・私見による『ムーンライトシンドローム』の解釈です。これは、無限に存在する解釈のうちの“たったひとつ”の解釈に過ぎません。感覚が異なれば、解釈も異なるでしょう。感性が違えば、感じ方も違うはずです。本書を読み、眺め、利用して、あなたなりの『ムーンライトシンドローム』を思い描いてくれたら……ウレシイ!!

ISBN4-89563-862-6 C0076 ¥950E
毎日コミュニケーションズ◎定価：本体950円+税

HUMAN ENTERTAINMENT
HUMAN

TRiP（トリップ）セヨ!!

目に飛び込む文章と画像で
あなたを「ムーンライトシンドローム」の世界へ没入（ダイブ）させる